

Fringe in Motion

周縁から、動き出す。

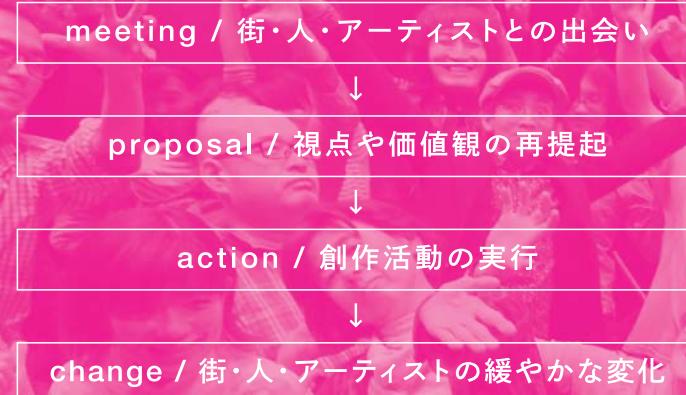
KANAZAWA FRINGE

カナザワ・フリンジ

2016 – 2017

はじめに

「カナザワ・フリンジ」は、アートな視点で金沢の課題・人・場所と向き合いながら2年サイクルで創作活動を行うアーティスト・イン・レジデンス(滞在制作)プログラムです。 「フリンジ」は周縁を意味します。国内外から招聘するアーティストやクリエイターが、街や人の多様なフリンジと出会い、



という創造的な循環を積み重ね、金沢が創作活動の拠点(Hub)となることを長期的な目標として実施しています。

2015年に前身となる「Museum x KNZ Fringe～街と、人と、出会う」を実施。以降、リサーチ年とクリエイション年の2年サイクルで継続することを決めました。2016年はリサーチ年「AIR21:カナザワ・フリンジ」として、5人のディレクターがアーティストやクリエイターとともに7つのリサーチプロジェクトを実施し、6月から9月にかけて公開イベントを開催しました。そこで得られた収穫をもとに、2017年に5つの新作の滞在制作を実施する「カナザワ・フリンジ」プログラムへと繋げていきました。

この記録集は、2016年度から2017年度にかけての変遷をまとめたものです。
アーティスト、ディレクター、地域との協働により生まれた「出会いの形跡と推移」にふれていただけましたら幸いです。

Introduction

KANAZAWA FRINGE is an artist-in-residence program in which creative activities are undertaken over a two-year cycle to examine the challenges, people, and locations of Kanazawa from an artistic perspective.

The program's long-term goal is for Kanazawa to become a hub for creative activities by implementing a creative spiral of:

- (1) interacting with the town and its people,
- (2) proposing new perspectives and values,
- (3) undertaking creative activities, and
- (4) bringing about change in the participating artists, the town, and its people.

Background

2015

Launched “Museum x KNZ Fringe - Meeting with the City”. Following its success, decided to develop and continue the program as a two-year cycle program.

2016

The year 2016 was allocated as research year “AIR21: Kanazawa Fringe”, where five Directors were invited to research on seven topics. Public events based on their outcomes were held between June and September.

2017

Five teams of domestic and international Artists and Creators were invited by five Directors to create and produce works while living in Kanazawa for “KANAZAWA FRINGE 2017”.

金沢21世紀美術館交流課
プログラム・ディレクター/コーディネーター
黒田裕子

歴史文化都市・金沢で、ディレクターの視点と、起爆剤となるアーティストが交差する。これら3つの基本材料をミキサーでぐるぐると混ぜると何が現れるだろう。調理法によっては美味くもなり不味くもなる。素材そのものの力や新鮮さも必要だが、尖った独創性が調味料として欠かせない。仕上がりの最高の瞬間を捉える直感と瞬発力も必要だ。生成物には相反する思想、埋もれた逸品、異質な価値観が凝縮され、甘美な刺激を誘発し、時に毒を持つ。体内に取り込めばじわじわと発酵し、浸透していく。

アーティストを先導役に、金沢の地で人の営みが浮き彫りになるような創作と実験を行う。型やジャンルにこだわらず、新たな変化や芽吹きをただ信じて実践する。「カナザワ・フリンジ」はそんな試みの、いわばミキサーのような役割といえばわかりやすいだろうか。

始まりは2014年9月。英国の若手アーティスト集団「フォレスト・フリンジ／Forest Fringe」共同代表のアンディ・フィールド／Andy Fieldと一緒に金沢を巡った。フォレスト・フリンジは1947年より毎年夏に開催されている英国エдинバラ・フェスティバルの一角で、2007年よりリスクと冒險を伴う自主的な創作の場づくりを行っていた。そこで発表されるアーティストたちの表現は時代を捉え、生々しく先鋭的で、怖いもの知らずの勢いを放っていた。

2015年、フォレスト・フリンジで活動歴のあるアーティストをアンディと私で3組選び、金沢へ迎えて市街地に創作の場を求めた。さらに地元で表現活動に

携わっている人たちにアーティストのパートナーとして滞在制作をサポートしてもらった。新作を発表するまでの過程で、金沢のまちと人々に潜む魅力と可能性に触れ、創造と変革の源泉を垣間見ることができた。翌2016年には2ヶ年計画の「カナザワ・フリンジ」を実現するべく、パートナーたちをディレクターとして迎え、創作テーマやアーティストを見出すことから企画を立ち上げていった。

人は何を求める、何に駆られて生きるのか。楽しみも苦しみも、己の存在や社会の在り方を問い合わせ続ける旅路で表現活動はその解を探求する場としての社会的役割を有している。ここに記録された5つのプログラムは、ほんの小さな出来事だったかもしれない。だが創作の過程で、あるいは発表の場で強度のある体験をした作り手も観客も、新たな力で前進していくだろう。「フリンジ／周縁」という概念は多様性を包摂する。日常の事柄が多数派の意向に取り込まれ均一化することに違和感を感じるならば、恐れずそこに眼を向ける自身の判断軸と勇気を持ちたい。「周縁から、動き出す。」踏み出す一歩が思考となり、行動は記憶として受け継がれ、豊かな土壤を形成していく。ここに「カナザワ・フリンジ」を実行できる環境があることを幸運に思う。

最後に、このプロジェクトを通じて出逢ったアーティスト、地域の方々、観客、関係者、スタッフ、全ての皆さまとのご縁に深く、感謝の意を表します。

はじめに / Introduction ━━━━━━ 02

「カナザワ・フリンジ」の旅路 ━━━━━━ 04

プログラム

Program1 TEI-EN Bento Project ━━━━━━ 10

Program2 Fun with Cancer Patients がん患者とがんトーク：金沢編 ━━━━━━ 22

Program3 Walk with Me ━━━━━━ 34

Program4 あさのがわのいえ ━━━━━━ 46

Program5 アーティストの目 ━━━━━━ 58

ディレクターによる座談会 ━━━━━━ 70

「カナザワ・フリンジ」の歩み ━━━━━━ 76

レポート ━━━━━━ 78

紹介メディア一覧 ━━━━━━ 79

KANAZAWA FRINGE(Summary) ━━━━━━ 80

謝辞 ━━━━━━ 92





2年間に出会った方々が一同に会し、

新作を祝う前夜祭を開催。

ここで5つのプログラムをお披露目し、

関係者や来場者が交流する場として緩やかに、
賑やかに開催しました。

前夜祭

2017年11月2日(木) 18:00~21:00

会場:金沢21世紀美術館 シアター21

入場無料(出入り自由)

参加者

稻田俊輔、ブライアン・ロペール、入口衛、
ウェイ・シンエン、新人Hソケリッサ!、歌島昌智、
なかむらくるみ、井上千明、村住知也、
四井雄大、sanchan(noid), tanaka scat, K.Onishi

出店

one one otta(軽食、ドリンク)

エリックサウスと四井雄大(カレー2種 限定40食)

地域支援センターポレボレ(雑貨、おやつ)

小坂保行(ピッグイシャー)

TEI-EN Bento Project

郷土食のフリンジはどこにある？



アーティスト

稻田俊輔（料理人・飲食店プロデューサー/名古屋）

京都市経済学部卒業後、食品メーカー勤務を経て料理の道へ。現在は、和食、フレンチ、エスニックなど幅広いジャンルで飲食店の業態開発やレシピ開発、プロデュースを行っている。特に2011年に東京八重洲で立ち上げたエリックサウスは、それまで日本ではほとんど知られていなかった南インド料理をカジュアルに提供する事でその後のブームを牽引し全国的な知名度を得た。本業以外にも、食に関する豊富な知識やプロとしての経験を元に独自の切り口で語られる食文化論がSNSを中心に話題となっている。

<https://twitter.com/inadashunsuke> <http://enso.ne.jp>

ディレクター

上田陽子（金沢アートグミ）

石川県金沢市生まれ。早稲田大学商学部在学中に金沢アートグミの立ち上げに参加し、そのまま理事・常駐スタッフに。展覧会・イベント企画、コーディネート、デザイン制作、ツアーガイド、作家の悩み相談など色々行う。人生における食の重要度が高いタイプ。旅好きが高じて現地の味ままを好む。好きな郷土料理はかぶら寿司と蓮根羹。

<http://gallery.artgummi.com>



「おいしい」か「おいしくない」か。
食の評価軸は二項対立ではない。

食べるのが好きな私は、最近もやもやと考えていた。風土と歴史によって形作られてきた金沢の郷土料理が、観光化も相まって特徴的なものばかり偏って紹介されていること。そしてその人にとって「おいしくない」食べ物を簡単にヘイトできる人が多いこと。

ならば、足元の郷土料理から再考し、そこを起点に、新たな気持ちで食の世界を冒險することに取り組んでみたい。今回お招きした稻田俊輔氏は和食、フレンチ、エスニックなど幅広いジャンルで飲食店プロデュースを行いながら、本業以外に独自の食文化論を展開している、「良いマズさ」も楽しみ、等しく評

価できる方だ。

そこで、2016年のリサーチ「架空のニューヨーカーシェフ、ジョン・タベルスキーが愛ある誤解のまま金沢の郷土料理を新提案する」という設定の下、2017年には個人が1食に向き合えるお弁当スタイルの『金沢奇妙弁当』の制作を開始した。

「有名じゃないけどいい」「分からぬけどいい」美術作品があるように、「知られていないけどいい」「おいしくないけどいい」料理がこの世界には沢山あると信じて。(上田陽子)

Program 1

TEI-EN Bento Project 活動の流れ

絶滅危惧?!レアな郷土料理に会いに行く [2016年7月]



まずは金沢の郷土食リサーチに市外の飲食店や小売店巡り。稻田さんたっての希望から郷土の保存食「てんぱ漬け」の生産者さんを訪問しに白山市へ。てんぱ漬けは吹立菜等の青菜を塩漬けにしたもので、昭和初期まではこれを煮た「てんぱ煮」が加賀平野を代表する料理だったそう。生産・輸送技術が発達した今ではあまり食べられなくなった保存食ならではの豊かな滋味とポテンシャルを改めて感じる。(後、お弁当の一品に採用)
[石川県白山市]

架空のレストランTEI-ENオープニングパーティー開催 [2016年9月]



リサーチの締めくくりとし、「ニューヨーカーシェフがニューヨークに新しくオープンする金沢料理のレストランTEI-EN」のオープニングを想定したイベントを行った。リサーチ・試作・撮影を経てレストランのメニュー表を制作し、メニューの17品の中から9品を立食スタイルで実食頂いた。[shirasagi / 白鷺美術・石川県金沢市]

料亭弁当から駅弁まで、金沢のお弁当リサーチ [2017年6月]



食について「自己と対話」しやすいよう、2016年のようなパーティー形式ではなく幕の内弁当という形式を採用し、構想を進めることに。金沢で販売される郷土料理のお弁当を複数食べ比べて市場調査を行った。飲食業界の現場にいる稻田さんにより、各弁当のコンテンツ・味だけでなく原価や労働環境の現場までが推測された。金沢の本格的な和食弁当は安すぎる傾向があり、企業努力が伺えるという…。[金沢21世紀美術館 会議室1]

郷土料理研究家 青木先生と面会 [2017年7月]



石川の郷土料理研究家の第一人者である青木悦子先生にご挨拶。以前より青木先生の著書は参考にさせて頂いていたが、今回初めての面会であった。先生が最近考案された「アップル治部煮」(金沢郷土料理の代表格・治部煮にワインで煮たリンゴが入っている)に触発され、制作する弁当の中に「アップル治部煮アロマティック」を入れることをご快諾頂いた。[四季のテーブル・金沢市]

金沢奇妙弁当、100食販売 [2017年10月-11月]



弁当名は、金沢の郷土料理弁当としては奇妙の意で『金沢奇妙弁当』に決定。近江町市場の調理実習室を使用させて頂き、2017年10月と11月に計3回、全100食を制作・販売した。弁当は幕の内スタイルで、(写真左上より)ゆで魚寿司・異物混入ギョーザ・アップル治部煮アロマティック・びっくりなます・日の丸ごはん・てんば煮・鯉大根アンブルティヤル・口取り・原価調整パエリアの9種。昨年試作した料理を組み込みつつ、各国の郷土料理と金沢の郷土料理が共演する構成となった。

三者三様。私にとっての『金沢奇妙弁当』レポート [2017年10月-11月]



参加者一人一人から「私にとっての『金沢奇妙弁当』レポート」を提出してもらい、食べる前に計画した食べる順番、実際に食べきった順番、郷土料理認知度や感想を記入頂いた。また金沢奇妙弁当のしおりとして「詳細解説」を添え、一品一品の背景や味覚マトリックスを記載し、シェフの思考や食への提言をビジュアル化した。

「トークイベント幕の内劇場」 [2017年11月4日]



総まとめとし、『金沢奇妙弁当』の仕込みを見学＆味見する「BENTO 仕込み見学会」とレポート分析を織り交ぜた「トークイベント 幕の内劇場」を開催。幕の内劇場では青木悦子先生の基調講演を皮切りに、食べ順や日本人の食事の概念の変遷、食べ順レポートの分析結果、とくに特徴的だったレポート提出者3名と稻田さんとの対話など、トピックは多岐に渡った。
[金沢21世紀美術館 レクチャーホール]

作り手を体験!再現レシピもちより会 [2017年11月5日]



食に貪欲な有志7名に『金沢奇妙弁当』の7品のレシピを渡し、レシピを忠実に再現／ご家庭のいつもの味を再現／独自のアレンジを加えるのいずれかで調理してもらい、その料理を参加者とともに食べるイベントを開催。それぞれの食に対する考え方などを共有しながら、郷土料理の新しい作り手を体験する機会となった。[金沢21世紀美術館 茶室 松涛庵]



○金沢奇妙弁当 予約販売
日時:2017年10月8日(日)、10月14日(土)、11月4日(土)
各日11:00～13:00
会場:金沢21世紀美術館
料金:1,500円 ※一日限定30個(11月4日のみ40個)

○BENTO 仕込み見学会
日時:2017年11月3日(金・祝)10:00～12:00
会場:近江町市場 消費者会館 調理実習室
参加費:500円
定員:15名

○トークイベント幕の内劇場
日時:2017年11月4日(土)13:00～15:30
会場:金沢21世紀美術館 レクチャーホール
登壇者:稻田俊輔、青木悦子、
金沢奇妙弁当10月の体験者より選抜3名
定員:先着80名

○TEI-EN井戸端会議-再現レシピもより会-
日時:2017年11月5日(日) 12:00～13:30
会場:金沢21世紀美術館 茶室 松涛庵
参加費:500円
定員:15名

企画協力:四井雄大
映像撮影:前伊知郎
当日運営協力:西川圭祐
協力:円相フードサービス、青木クッキングスクール

撮影:奥祐司(p.12下)、前伊知郎(p.14上)、池田ひらく(p.15上)

アーティスト

稻田俊輔

料理人・飲食店プロデューサー

参加を決めた理由

ビジネスとは無関係のプロジェクトという事で、美味しさ(#顧客満足)を最終目標にしない(する必要が無い)という事に大きな意義を感じてのスタートでした。

2016年のリサーチでは「妄想の金沢料理レストラン」というテーマで、言うなればお店の「立ち上げ」を行いました。お店というのはそのなりわいの中で日々

変化していくものですから、1年後そのお店がどうなっているかという事を想像するのはむしろ当然のことでした。

2017年は「お弁当」をテーマにする事で、単に一方的に物語を伝えるだけでなく、受け手とのインタラクティブな関係性の中で予想もしない物語が生まれるのではないかという大きな期待がありました。

プログラムをやってみて

金沢の人々が、金沢の食に対して誇りと自信を持っているという事をことあるごとに感じました。誰だって地元の文化は愛してると思いますが、ここまで街に迷いもなくある意味「全肯定」する土地というのはなかなか無いかもしれません。

プロジェクトのテーマに関して言えば、食は共通言語のようでいて実はその価値観は一人一人大きく異なり、ある意味「断絶」があると改めて強く感じました。そしてその断絶は決してネガティブなものではなくそこそこが面白さなのだと。

今後への展望

プロジェクトの後、実際に郷土料理がテーマのレストランを手がける事になりました。金沢ではなく岐阜なのでですが。その時に、気付けば完全に今回のプロジェクトの延長という感覚で取り組んでいる自分

がいました。嘘から出た誠というか、虚構と現実が急接近した感覚です。逆に、現実と決して交差しない徹底した虚構の食はどういうものだろうと考えてみたりしています。

ディレクター

上田陽子

金沢アートグミ

プログラムをやってみて

プロジェクト開始時、稻田さんは「金沢の食はセンスよくあらんとしているようで、全体的に優等生のような印象」と評した上で、TEI-ENでは今さら優等生の優れている点を褒めず、逆にコンプレックスである部分の魅力を伝えたいとおっしゃっていました。

その1つの結論として出来上がった『金沢奇妙弁当』のコンテンツは、TEI-ENチームワークの賜物で、美味しさや万人受けを最終目標とせず、金沢の郷土料理から世界へ、また自身へと思考を行き来できる内容に仕上げることが出来ました。

絶滅が懸念される「てんば煮」の再評価に始まり、世界標準では鴨肉がスペイスと料理されない方が珍しいという視点から転じたスペイスアレンジ「治部煮」、魚を塩茹でするのみという金沢が誇るべきミニマル家庭料理「ゆで魚」を主役にした押し寿司など、9品目すべてにジョン・タベルスキー／稻田俊輔、TEI-ENチームメンバー四井雄大の視点が何重にも織り込まれています。

また食べ順レポート結果からは、たとえ『金沢奇妙弁当』や和食であっても、輸入された前菜/メイン/デザ

ートという西洋料理の食べ順を多くの日本人が共有し実践しているという「ねじれ」が実証されました。奇妙という名前にひっぱられすぎるくらいがあったのは少し残念。普通の幕の内弁当と思って食べると奇妙なだけで奇をてらった料理は一つもない注意書きを度々添えたものの、「思っていたより普通」「奇妙ではない」というところに感想が収まっている人もいました。

では結局、郷土食のフリンジはどこにあったのでしょうか?時代の変化によって影を潜めざるを得なかつたもの。家庭料理すぎて表面化しにくいもの。万人受けしない味、派手な特徴がないもの。確かに「加賀百万石の郷土料理」という文脈で紹介するときはこぼれ落ちてしまう陰をどこかに抱えていました。

でも県境や国境がただの区分に過ぎず現場では地続きであるのと同じように、そこにも同じ豊かさがあり、名物になる可能性があり、それぞれの物語があるのだと再認識しました。

今後への展望

私の中ではまだカナザワ・フリンジは弱火ながらも継続しています。フリンジ後、稻田さんが岐阜の郷土料理店をオープンさせたことは本件と全く無関係ではないのではないか…と淡く期待しつつ、フリンジ

関係なしに、今後も海鮮丼ではない近江町市場の魅力再発見などTEI-ENチームで食を楽しむ企画と一緒にしていくのだろうと、なぜか確信しています。

関係者の声



四井雄大

陶芸家/TEI-ENチーム メンバー、
TEI-EN器 制作

いなさんと金沢の地でこんなのがりりな企画が実現できて嬉しい限りです。TEI-ENチームありがたし。いやしかしあまだ(特にいなさんの)食での表現欲求は尽きないことでしょうし、またなにかやりたいですね。ぼくも(役者でなく)もっと器の内外へ茶々入れをしてゆきたい。
約6年前、岐阜で彼のお店のバイトとして働いていたぼくは、それあなんて、ぼくは何を書き始めてを縁として(カレーをはじめ)食しましたんだろう。

ジャンルへの扉を開けたわけなんですが、それを自分なりに深める過程には彼の「食への言葉」が必要不可欠だったなあと思い返しながら確信します。ひとつひとつ、おいしくなさまでもおいしさと等しく、繋がりの方法で(派手に隠しつづ)肯定していく様は、目的をどこに設定しようと正確かつまた樂的で、ジャンルを越えた作り様だなあなんて、ぼくは何を書き始めてしまったんだろう。

弁当を供するだけでなく、どう食べるか?のレポートを参加者に課したのは最も興味深いことでした。弁当とは、どう食べるか(場所の選定と時間の流れ)を(ある程度ヒントを出すことはできるけれど、最終的には)消費者に委ねるしかない、生産者から見れば非常に不自由なもの。どう食べるか?は何を食べるかよりも時には重要だというのに。傾向を(おそらく対策も)知りたいと思うイナダさんは、生産者として消費者として、本当に食べるところが好きなんだなあと思いました。弁当の不自由を愛する弁当屋としては、その分析の行く先が知りたいものです。



村田美紀江

ムシャリラ・ムシャリロの弁当屋/
TEI-EN仕込み見学会・
トークイベント「幕の内劇場」登壇



堀至以

金沢美術工芸大学 大学院 博士課程3年/
『金沢奇妙弁当』の仕込み補助、
トークイベント「幕の内劇場」登壇

『金沢奇妙弁当』を食べるにあたり、まず食べ順を考えるということは無意識の日常を見つめ直す作業であった。普段どう食事をしていたのか思い返しながら食べ順を決めた。しかしいざ食べ始めると食べ合わせることの好奇心がかきたれられ、およそ当初の計画通りに食べることはできず、箸は個性豊かな幕の内の9マスを楽しく行き来した。その気持ちを特に強くさせたのが中盤に差し掛かったところで出会った日の丸ご飯のチエリー。「おいしい」とは、必ずしも固定の味があるのではなく、発見されるものでもあるのだという学びがあった。

アンケートより

金沢奇妙弁当

奇妙すぎて日本人の口にはなかなか合わないと思う。もっとシンプルに日本食又は他国を極めたほうがいい、融合したいなら勉強不足。見た目と量は良かったが勝負しないといけない味が全くダメ。これで料理人とは言えない。私が作った方が上手し売れる自信あり。くせが強い!

最初に順番を決めていた時にあまり意識していなくても食べる順番を考えている事に気付かされた。外国人が三角食べをしないために一品ずつ食べてしまうように、日本人的に全体のバランスや順序を考えているように思えた。しかし日本食のような順番意識というよりは洋食のデザートを最後に食べようとしている自分に気づかされた。昔は好きな物嫌いなものを中心に考えていましたが、今は全体のバランスを考えていた。おいしいまずは慣れであると言った人がいる。まさにそれを感じるよい機会となりました。

これは奇妙?な弁当をじっくり食べることで自分と社会(世界)に目を向ける大きな企画だったんですね。ごちそうさまでした。

トークイベント幕の内劇場

昨日も今日も大変面白く楽しかったです。弁当の分析や弁当を食べられた方とのトークが特に良かったです。

再現レシピ

「再現レシピ」とイベント名についているが、それぞれの再現者が食の専門家か、そのレベルの方達で、個性的なアレンジが入り、それはそれでとても面白かった。集まった人達の食に対する愛が会場に満ちていて、幸せなひと時だった。イナダさんの大らかさで、再現できないようなメニューも、すてきな評価を述べられていて、楽しい気分のしめくくりとなった。

BENTO仕込み見学会

シェフの、食に対する思いが伝わりとても興味深いトークだった。スタッフのみなさんとの会話も良かった。料理の過程を見るのが好きなので楽しかった。試食もおいしく、満足。「食」と「笑」、自分の好きな2大要素が入ったこのプロジェクト、すばらしいです。

Fun with Cancer Patients がん患者とがんトーク：金沢編

こころが開く 居心地のいい場所

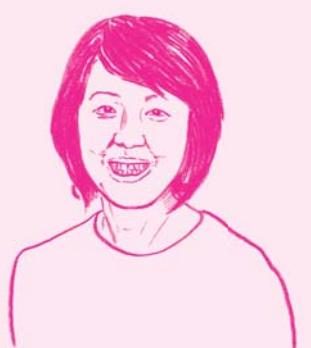


アーティスト

ブライアン・ロベール（パフォーマー・演出家・脚本家 / 米国・英国）

パフォーマー、教師、キュレーターなど様々な肩書きを持つマルチアーティスト。個人のからだが他者からの眼差し・監視・おせっかい・愛情の被写体になるありさまを作品にしている。国内外の医療教育機関、美術博物館、市場、野外などあらゆる場所で作品を発表。挑発的なユーモアと深淵な洞察力を駆使した創作が特徴。

<http://www.blobelwarming.com>



ディレクター

黒田裕子（金沢21世紀美術館）

ダンス、パフォーマンス、音楽を中心としたパフォーミングアーツ公演や交流イベント事業を企画制作。2014年より街へ飛び出し、社会との接点の中で手法やジャンルを超えた新作の創作を行うアーティスト・イン・レジデンスプロジェクト「カナザワ・フリンジ」をプロデュース。

<https://www.kanazawa21.jp>



がんについてあなたと話がしたいんです。

フレンドリーな笑顔を湛えた外国人男性にこう誘われたら、どうしますか？唐突な出会いに乗るか反るか。その一瞬の選択が病と生死にまつわる考えを変えるきっかけになるとしたらー。

がんを経験したアーティストが闘病中の患者や家族、患者をサポートする専門職とともに、全く新しい観客参加型のパフォーマンスアートを創る。それは日本人の（無）意識、先入観、規範、慣習といった「常識」を問い直し、個人や地域を少しずつ変えるきっかけになるかもしれない。

2015年夏、自身ががん経験者であるアーティスト、ブライアン・ロベールに出会ったとき、私は彼の笑顔を眺めながらアートと地域の創造的な関係を「がん」をテーマに探る未知の領域に挑んでみたいと思った。果たしてそれはどういった様相を呈するのだろう、ということは当時、皆目検討もつかなかったのだが。

その後の約2年に渡る調査と創作活動は、金沢で協働することになる日本の人たちへの冒頭の呼びかけから始まった。（黒田裕子）

Program 2

Fun with Cancer Patients

がん患者とがんトーク:金沢編 活動の流れ



「はなうめ」との出会い

[2016年6月15日]

がんをテーマとするプロジェクトに参加してくださるパートナーに会うため、「石川県がん安心生活サポートハウス つどい場 はなうめ」をブライアンと訪問。看護師の木村美代さんがたこ焼きを振舞い、和んだ雰囲気で利用者の方々とざっくばらんにお話しした。がんや病をテーマに創作活動をしているブライアンに皆さん興味津々。一方で、日常生活でがんをオープンにしづらい日本の状況を知り「気兼ねなく会話ができる場をつくれないか?」とヒントを得た。[石川県金沢市]

ブライアンのワークショップを開催

[2016年6月17日、18日]



ブライアンのアーティスト活動を知ってもらうため、「We Have to Talk About Cancer(がんについて語ろう)」アーティストトーク&デモンストレーション、「Let Me Hear Your Body Talk(身体のこえを聴こう)」ワークショップを開催した。患者、家族、医療従事者など参加者の手応えを感じながら互いに学び合う濃密な時間が生まれた。[金沢21世紀美術館 シアター21]

患者・家族との合宿

[2017年6月17日、18日]



1年後、プロジェクトへの参加呼びかけに応じた患者や家族17名とスタッフが集い、1泊2日の合宿を開催。梅雨入り前の山間の自然に囲まれ、食事や温泉を共に過ごしながら気持ちを解きほぐす。「医者や友人を相手に本音と建前はどう使い分ける?」「病について人に言われて嫌だったことは?」などの問いかけがブライアンから次々に投げかけられ、時を忘れて語り合った。[金沢湯涌創作の森]

専門職とのミーティング

[2017年6月19日、20日]



呼びかけに応じた医師、看護師、薬剤師、美容関係者、社労士、カウンセラー、学生など様々な職種の33名が参加。合宿で患者や家族が本音で書き留めたメモを真剣な眼差しで読み、患者と向き合う専門職としての自らの役割や日々の活動を振り返った。合宿参加者も含めて、プロジェクト参加者を「Fun with Cancer Patients 金沢メンバー」(以降、金沢メンバー)と呼ぶことにする。ここから作品の構想が一気に進展した。

[金沢21世紀美術館 会議室1]

新作・がん患者とがんトーク：金沢編 プレゼンテーション [2017年10月2日、5日]



ロンドンと金沢をSkypeで繋ぎ、ブライアンが作品の構想を金沢メンバーに説明した。シアター・ホワイエを銭湯のようなリラックスした空間にしつらえ、初対面の来場者と2人～6人ずつのグループになる。一緒にたこ焼きを食べて法被を羽織りシアターへ入場。場内では会話の進行を指南してくれる「ベンリカード」を使ってがんをテーマに会話をを行うという。困惑と期待が入り混じる。

[金沢21世紀美術館 会議室1]

本番前トレーニング [2017年10月24日～31日]



本番10日前にブライアンと金沢メンバーが再会。説明会を再度開催し、実際の会場でシミュレーションを繰り返した。風船のオブジェ、バナーやのれんの設営が同時進行する側で、会話の流れの確認やベンリカードの読み合わせを行った。カードの使い勝手や内容に関する質疑応答を通して、経験したことのない「会話型」作品の真髄に迫って行った。[金沢21世紀美術館 シアター21]

会場エントランス [2017年11月3日～5日]



入り口に掲げられたバナーにはブライアンのアーティスト・ステートメントが日英併記で印刷されている。奥のテーブルに座った法被姿のブライアンが拙い日本語で来場者をお出迎えし、笑いを誘う。来場者は法被を羽織り、カウンターでウェルカムドリンクとたこ焼きやお饅頭を頬張り、金沢メンバーとのれんを潜って場内へ進んだ。
[金沢21世紀美術館 シアター21]

がんトーク開催 [2017年11月3日～5日]



来場者はがん会話の「しろうと」、金沢メンバーは「くろうと」。場内ではグループ毎にテーブルやちゃぶ台を囲み、6色の「ベンリカード」に書かれたブライアンの言葉を読みながら会話をした。挨拶代わりの簡単な質問から次第に本題へ。当初30分を見込んでいたが平均60分、最長で2時間半にも及び、最後は「くろうと」のれんから一緒に退出して終了。来場者が書き込んだカードはホワイエに展示し閲覧できるようにした。
[金沢21世紀美術館 シアター21]



Fun with Cancer Patients がん患者とがんトーク:金沢編

○体験:2017年11月3日(金・祝)~5日(日) 11:00~15:00

○展示:2017年11月3日(金・祝)~5日(日) 10:00~17:00

会場:金沢21世紀美術館 シアター21

【金沢メンバーのみなさん】

あねざきしょうこ、池田玲子、尾田未帆、釜井麻希、河崎幾恵、神野俊介、北川裕梨、齋藤優生、坂本茂吉、佐藤ことみ、洲崎寛之、高木純一郎、高橋恵子、高山清敏、竹内京子、谷本弘美、田谷美智子、塙本敦也、津田昌樹、土田敬子、中村委希子、名越睦子、能上美喜子、野村啓美、橋典孝、橋本祥一、橋本秀子、坂東千雅、疋津陽子、久田充子、平山紀子、福村美紀子、山口節枝、山本芳郎、山本竜二、渡邊睦美(敬称略・50音順)ほかの皆さん

スタッフ:木村美代(石川県がん安心生活サポートハウス看護師)、入口衛(デザイン)、クリスタ・ホルカ(写真)、ジョー・アラン(プロダクション・マネージャー)、福村美紀子(ケータリング)、吉田裕梨(制作アシスタント)、奥田はる香(運営アシスタント)、加世多美怜、小森隆文、田井麻子、塙本浩子、筒井直子、松野恵、寄田茜(設営アシスタント)、橋爪真紀(通訳)

テクニカル・スタッフ:合田義弘(テクニカル・ディレクター)、株式会社 金沢舞台(舞台、照明)、城下寛(音響)、株式会社 プロフォーカス(映像)、株式会社 ホクスイ(設営)

道具・消え物:MUGI、SKLO(家具)、株式会社 ふくなお(たこやき)、カセイ食品株式会社(おだんご)

協力:石川県がん安心生活サポートハウス つどい場はなうめ

撮影:Christa Holka(pp.23-25,27,28[右下を除く],29[左上を除く],30-32)

アーティスト

ブライアン・ロベール

パフォーマー・演出家・脚本家

参加を決めた理由

私は前々から日本でプロジェクトをやりたいと思っていました。日本は私が馴染んでいる世界とは異なった文化環境なので、なおさら惹かれます。でも実際のところ、私たちはとても似ているということがわかりました。

プログラムをやってみて

日本の皆さんには、がん、病、死、人の脆弱さ、といった多岐に渡る議論を真剣に行い、考えを深めていくことができる可能性を持っています。ただ、それをスタートさせるための最初のきっかけが必要なだけなのです。

今後への展望

『Fun with Cancer Patients』は慎重に、何度も話し合いと検討を重ね、不安と共存しながら創作しました。来場者に理解してもらえるだろうか。患者やその家族をサポートできているだろうか。自分らしく参加してもらえるだろうか。どうすればより居心地のいい空間をつくれるだろうか。結果として美しく、オープンな場となり、金沢メンバーと来場者にとって安心できる環境を提供することができました。ここで実現した、誰をも受け入れができる空間づくり

何より黒田さんががんをテーマにするプロジェクトを金沢で実施しようとする熱意を感じ、とても嬉しかったのを覚えています。取り組むには勇気のいるトピックですし、多くの企画者は避けようしますから。

合宿から本番に至るまでの過程でお会いした全ての皆さんと交わした会話は、私にとってかけがえのない宝物となりました。その積み重ねが結実し、人と人の共感を生み出したこの作品を誇りに思います。素晴らしい体験でした。

を今後の作品づくりでも最優先に考え、私のプロジェクトに通底する要素となるでしょう。私自身が誰かの質問に答えるのではなく、皆さん、そして自分自身から多くの質問を引き出すことに注力しています。今後、この作品が応用されて地域の人たちがさらに力強く発言し、自信を持っていただけることを願っています。私自身、これまでに投げかけられた多くの問い合わせと、一緒に創作した他者のお陰でアーティストとして成長することができたのです。

ディレクター

黒田裕子

金沢21世紀美術館

プログラムをやってみて

この2年間、金沢や東京で幅広い年代のがん経験者や医療関係者とお会いし、日本におけるがんと医療、生活や仕事の状況についてお話しを伺った。誰にでも起こりうる病や生死にまつわる課題を抱えながら、家庭で、友人と、職場で思うように話し合えず窮屈な思いをしているケースが多いようだった。英国でも状況は類似しているが、日本では閉塞感をより強く感じる、とブライアンは語った。人間関係の潤滑油としての「建前」が優先され「本音」を許容する環境と機会が少ないのでないか。いのちに関わることを「建前」で済ませていて良いのだろうか。

FwCP金沢メンバーは合宿やミーティングで親交を深めながら気持ちを言語化し、学び合い、がんを話題にすることに慣れていた。「がん患者とがんトーク：金沢編」の最終章では「あなたが大病を患った時、最初に誰に、どこで、どういう言葉で伝えますか?」という

今後への展望

このプロジェクトを通して出会った美術館と地域。「がん」を共通項に、金沢メンバー、ブライアン、スタッフが相互理解と信頼を積み重ねながら実施した「共に創る」関係性のプロジェクトだったと感じている。最終日に「なぜ終わってしまうんだ!」と冗談混じ

問い合わせをしている。異次元空間でどこか他人事のように会話を楽しんでいた来場者はここで自分自身に起き得る現実の可能性を突きつけられる。さらに「がん以外でも、私たちが考え、話し合うべき社会的課題は他にありますか?」という問いは、私たちが社会の一員として他の課題についても考え、行動し、解を導きだすことが求められていることを示唆している。『がん経験者が居心地良く生きられる社会環境は誰にとっても生き易いはず。だからがん患者は社会でリーダーシップを発揮できるんだ。』

ブライアンの言葉は自身を顧みながら、一緒に歩んで行こうという私たちへの呼びかけだ。

金沢メンバーと来場者ががんトークという「会話」を力にし、「くろうと」のれんから一緒に笑顔で出てくる様子を多く目撃した。自己を肯定し、新しい視点を得て、次の一步を踏み出す勇気を見出された現れだったと思う。

りに叫んだメンバーの言葉が脳裏に焼き付いた。高揚したエネルギーを少しずつ落ち着かせ、私たちはゆっくりと日常に戻って行った。イベントは終了したが、意識は持続し、新たな始まりへの一歩を模索している。

関係者の声



木村美代

石川県がん安心生活サポート
ハウス つどい場はなうめ 看護師

当事者も専門職も「しろうと」「くろ
うと」という言葉を与えられたことで
混乱し、とことん自分に向かうことにな
り。私はそんなみなさんをハラハラ
しつつ「大丈夫」という確信も持って
見ていました。それはちょっと不思議
な感じで、アートとのご縁というハプ
ニングが、ありえない化学反応と、出
会ったことのない自分をもたらしてくれ
たのだと思います。FwCPがハブニ
ングで育ってゆくと面白いんじゃない
かなあと感じています。



坂本茂吉

金沢メンバー



高山清敏

金沢メンバー

自分で何ができるのだろう?いった
い、何が始まるのだろう?と少し心配
しながら事前準備に参加していました。
非日常的な空間で非日常的な出
会いでリアルな会話をしている状況
が面白かったです。自分から縁遠いと
思っていたアートに少しでも参加でき
たことが素直に嬉しかったですが、最
後のミーティングで、メンバーである
患者さんの感想を聴き、振り返って
やっぱり生きる覚悟が違うな、と少し
恥ずかしくなったのを思い出します。



竹内京子

金沢メンバー



野村啓美

金沢メンバー

思った以上に興味を持って下さる方
が来てくれて、思った以上に会話を成
立したことが面白かった。そして会話後
の休憩室での盛り上がり!初めはがん
や病気の重い話に終始するかと思っ
ていたけど、本音と建て前の話題など
普遍的で誰にでも通じる会話になりました。
今までがんサロンなどに参加してい
て、がん患者や家族でなければ話
はできないように感じていたけど、本當
は誰しも心の会話をするような場を求
めているのかも、と思うようになった。

アンケートより

今回の作品は、はなうめや専
門家、当事者と会い、日本人の人
と対話をするなかで生まれた
ものだが、それはことごとく來
場者の私的な体験となって作
品がたちのぼることがとても
新鮮だった。シアターの設営
も親密な場としてできていた
し、入る前のドリンクやフード、
はっぴやのれんがあることで
「作品」として別世界へと足を
踏み入れるようにできていた
と思う。その「一見よくできた
場」で実際に話をするのはが
ん玄人とはいえ、進行やファ
シリテートとしては素人の人、
というギャップがなお一層き
れいな、整えられた自分では
なく、自分の言葉を探さざる
をえないような「リアリティの
ある想像」をもたらしてくれた
ように思う。フィクションでは
ない現実世界なのだけど、悪
い意味でなく日常から切り離
される「作品」としてとてもお
もしろいものだった。

新しい視点で病気のこと、が
んの事、人生について考
える事ができた。もう少し自
己の思いや意見について話し合
ったりできたらよかったです。ブライ
アンさんがあのカードの問い合わせ
についてどう思っているのか知りたかった。

がん体験者自身が自分の事も
語って下さる事で当事者の氣
持ちがよくわかり、勉強になっ
た。普段がんの相談支援をし
ているが普段からこうした話
ができるように私(達)も努力
しなければと思った。

がんについてがん患者につ
いてまたその家族について考
える事を通して自分や自分
の家族に置き換えて考える貴重
な機会になった。

がんとアート、一見何の接点も
ないものを対話という形で合
わせるという企画に驚きました。
会話をしていただいたメンバー
のあたたかな対応にリラックス
して話せました。普段がん患者
さんの話を聞く事が多いです
が、自分の話を聞いてもらう機
会がないのでいい企画でした。

普段考えないような事を深く
考えるとてもいい機会になり
ました。病気に苦しむ方と話
す時、その方自身のこと、その
背景について深く考えて言葉
を発することはとても大事に
なってくると考えていました。
しかし今回のイベントを通じ
て、自分自身の考えとしっかり
向き合う事も、同様に大切だ
と思いました。

こうしたパブリックの場で人
生観について、がんについて
考るきっかけをもつというア
イディア、とても良いと思いま
す。もっともっと、全ての人が
どんな話題もフラットに話し
合える社会に変えていたら
いいと思います。

とても刺激を受けたし、感情
が解放されたと思う。家族の
がんに動搖していたが、動搖
の程度が穏やかになった気
がします。

患者さんがん実体験を看護
師としてではなく、「1人の人」
として聞く事ができてとても貴
重な機会となりました。ありが
とうございました。(長野県)松
本でもこういったイベントがあ
ればいいなと思いました。

空間が活かされている対話の
場でとても価値ある時間でし
た。場の力と人の力は新しい
ものをうむこと体感できました。

入口がちょっと怪しげでしたが、
中味はとても興味深いもので
した。明るい屋外でやってみる
のも良いかと思いました。

こういうアート、パフォーマンス
もあるのかと感じた。日頃、他
人とは話さない事を話ができた。
がんの人の心を開かせる/
気持ちを共有する良い試みだ。

Walk with Me

記録されない記憶の 行き先をめぐって



アーティスト

ウェイ・シンエン（アーティスト/台湾）

1986年米国生まれ、台湾在住。2009年国立政治大学(台湾)にて政治学の学位を取得。シカゴ美術館附属美術大学(SAIC)にて修士号取得(写真とパフォーマンス)。優秀奨学生(2013年-2014年)。人のもつ社会性・物語性をテーマにした写真や映像、パフォーマンス作品を制作。金沢の滞在制作において、人と街の間にある親密な関係性に着目して作品を制作する。

<http://weihsinyen.com>

ディレクター

齋藤雅宏（Kapo）

アーティスト/アートコーディネーター/Kapoディレクター

1981年山形県生まれ、石川県金沢市在住。2007年筑波大学大学院修了。2008年からアートスペースKapoディレクター。2009年からAIRプログラム「CAAK & Kapo Creator in Residence」コーディネーター。これまで国内外から25名のアーティストを受け入れる。2016年に竹園工作室(台湾)とAIR交流を行なう。

<http://masahirosaito.weebly.com> <http://kapolog.com>



「アーティストがまちに飛び込んだ」その先のこと

カナザワ・フリンジはアーティスト・イン・レジデンス(AIR)を軸にした事業であり、街や人に取り組むという趣旨であった。プログラムを始めるにあたり、1年目は事業趣旨の確認も含めて「ソーシャリー・エンゲージド・アート(SEA)」への理解を深めようとした。SEAは地域や社会に能動的に関わっていくアートのあり方をいう。世界で実践されているSEAの定義、歴史、具体的な事例について、専門家の方にレクチャーをしていただいた。

2年目は台湾のアートスペース竹園工作室より紹

介を受けアーティスト、ウェイ・シンエンを招聘し、参加型のプロジェクト『Walk with Me』を実施した。竹園工作室はAIRや地域問題に取り組むアートプロジェクトを行なっており、Kapo(※)が2009年より実施しているAIRプログラムで交流している。(齋藤雅宏)

※Kapo(金沢アートポート)はアーティスト・イニシアチブで運営するアート・コミュニティ。アーティストの居場所となるスタジオを備え、地域の表現活動の場をつくっている。

2016年 調査

レクチャー1

社会に関わり、変化をうみだすアートとは? [2016年7月30日]



2016年の調査年に開催した最初のレクチャーでは、社会をよりよく変えるためのカタリスト(触媒)としてのアートについて、米国での事例を中心に学んだ。

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート:アーティスト・イン・レジデンスの社会関与の可能性」

講師:秋葉美知子(NPO法人アート&ソサイエティ研究センター リサーチャー)
[金沢21世紀美術館 シアター21]

レクチャー2

アーティストが滞在し、地域に関わるには? [2016年9月3日]



2回目のレクチャーでは、地域社会をより良く変えるためのアートについて、日本の事例をもとに、金沢でのAIR制度を用いたプログラムの可能性と課題について議論した。

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート:金沢におけるアーティスト・イン・レジデンスの可能性」

講師:工藤安代(NPO法人アート&ソサイエティ研究センター 代表理事) [金沢21世紀美術館 茶室 松涛庵]

Program 3

Walk with Me 活動の流れ

Walk with Me [2017年10月]



ウェイと金沢で暮らす参加者がふたりで街を歩く。歩くのは、参加者のお気に入りの道や思い出の場所。ほぼ初対面のウェイに対して参加者の記憶や気持ちが語られた。ふたりきりで出会い、対話し、時間を共有する。スタッフも同行しない。待ち合わせの際、一輪の花を目印にした。ウェイにとっては初訪問の街だが、参加者にとってはそれぞれ過ごした時間が蓄積した街である。23名が参加。
[石川県金沢市内各所]

聞かせて、あなたの「金沢」 [2017年10月14日]



ウェイは台湾茶の茶会を開いて、街の人をもてなした。自己紹介と企画説明も兼ねた会であり、これがきっかけで『Walk with Me』に参加した人もいた。

[金沢21世紀美術館 茶室 松涛庵]

*市民美術の日「オープンまるびい2017朝も夜も美術館」の一環として開催

誰かの思い出をたどる旅 [2017年11月3日～5日]



金沢の参加者とふたりで歩いた道を、今度はウェイが他の人に案内する。ガイドツアーを開催し、金沢の参加者一人ひとりから聞いた思い出の話、好きなところ、さまざまな想いがウェイを通してツアーの参加者に紹介された。知っている道も知らない道も誰かの記憶や気持ちを感じながら歩くことになった。

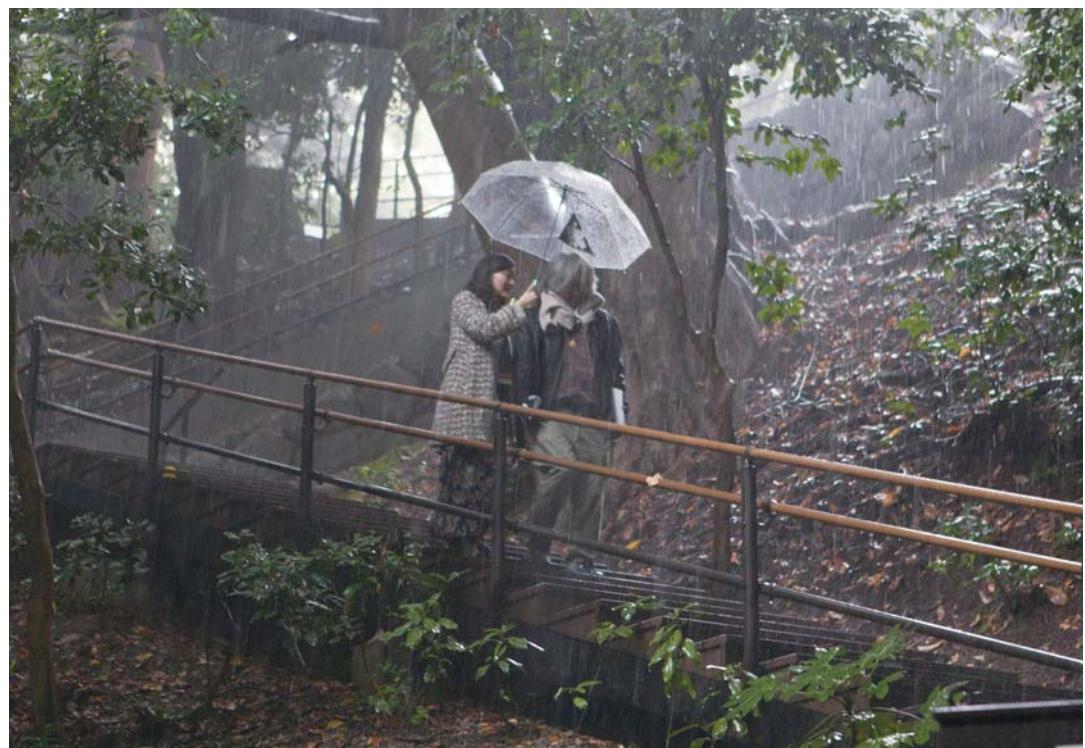
[集合：金沢21世紀美術館 会議室1、行き先：金沢市中心市街地]

まちに交錯する記憶 [2017年11月3日～5日]



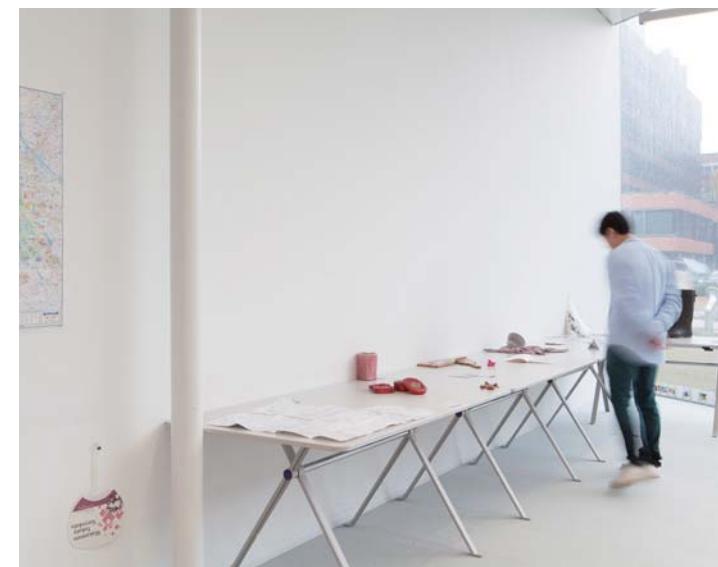
誰かの記憶をたどりながら、新しい物語ができるいく。ウェイが聞いた話に加え、ウェイ自身の感想も織り交ぜ、ガイドツアーの参加者に向けて語られた。そして、ツアー参加者たちとの新たな対話からもまた街の物語が重なっていった。[金沢市中心市街地]

ふたりきりの時間 [2017年11月3日～5日]



ふたりきりのときにしか話せないこともある。ウェイはガイドツアーの参加者ともふたりきりの時間をもち、個人的な思い出や感情を受け止めた。ウェイを媒体とし、街にまつわるさまざまな記憶が他者と共にされ、つながることで、知り得なかつた街の姿が浮かび上がった。[金沢市中心市街地]

記憶と記録と品物 [2017年11月3日～5日]



『Walk with Me』参加者の思い出の品物、参加者たちと過ごした時間の記録としてフィルムカメラで景色を撮影した写真、地図、ウェイ自身の思い出の品物である祖父の日記、ウェイ自身の日記などが展示された。大きな花瓶には、ウェイと参加者が待ち合わせの目印にしたのと同じ2種類の花が生けられた。
[金沢21世紀美術館 会議室1]



○展示
日時:2017年11月3日(金・祝)~5日(日) 10:00~17:00
会場:金沢21世紀美術館 会議室1

○ガイドツアー
日時:2017年11月3日(金・祝)~5日(日) 10:00~、14:00~、16:00~

『Walk with Me』参加者(2017年10月)
駒井華央里、岩崎木綿子、林朋子、池田加代子、前野真和、藤橋由希子、新甫涉、松野恵、大山信吾、澤井美恵子、神保玲子、
山田洋平、中森あかね、武野一雄、小西裕太、佐々木奈津、加世多美怜、渡会葵、篠田有里亜、西川幸洋、西川菜美子、原嶋夏美、
匿名希望、(敬称略・順不同)

展示サポート:林明彦(海桐藝術中心、台湾)
当日運営協力:宮越文美、林思妘
協力:竹圍工作室、高仙桃、北口加奈子、坂元圭、高橋奈々子(敬称略・順不同)

撮影:前伊知郎(pp.35,36下,38-39,40中・下,41-42)、寺西由佳(pp.37下,40上)、林明彦(pp.37上,43)

アーティスト

ウェイ・シンエン

アーティスト/台湾

参加を決めた理由

今回、カナザワ・フリンジに参加する機会が得られ、齋藤さんと仕事が出来てとても運が良かったと感じています。まず、金沢の街について、住んでいる人々から学びたいと思いました。なぜなら街というものはそこに暮らす人それぞれの過去や物語によって形作ら

れていると考えるからです。『Walk with Me』を通じて、とても素敵な路地や、秘密の道を案内してもらいました。そこはみなさんの思い出や感情がぎゅっと詰め込まれた場所でした。

プログラムをやってみて

カナザワ・フリンジというすばらしい冒険を通じて多くの事を得られました。この滞在で得た想いや考えを消化するには時間が必要だと感じています。金沢の人は私をおおらかにもてなして下さいました。私がまるで昔からの友人であるかのように、個人的な思い出を話してくれました。今回の私の作品は参加者のみなさんとの出会いそのものです。プログラ

ムを通じて感じる私の感覚は、あるガイドツアーの参加者とのやり取りに現れています。「自分の企画にも関わらず、アートというものが何なのかわからなくなる。でも私はこれでとても満たされた気持ちになるし、楽しいの。」と私が言うと、彼女は「私もそう思うわ。」と話してくれました。

今後への展望

金沢での『Walk with Me』の後、これを別の都市でも行なえるのではと考えました。現在、台北で『Walk with Me』を始めようとしています。台北は私が生まれ育った街ですが、知らない事や訪れたい路地や道が沢山あると感じます。訪問者として金沢

の街を歩く事と違い、自分の地元でその地元の人々と散歩をしようとするのは少し違いますね。いずれにせよ、なにが起こるか分からなくても、この歩くプログラムを続けたいと思います。

ディレクター

齋藤雅宏

Kapo

プログラムをやってみて

SEAと呼ばれるプラクティスでは、社会でのさまざまな課題にアーティストや人々が取り組む。カナザワ・フリンジでは一過性のイベントではなく、招聘したアーティストがライフワークに出来るようなプロジェクトを始めるきっかけをつくりたいと考えた。

2015年に北陸新幹線が開業したことによって金沢は観光地としてこれまで以上に脚光を浴びている。どの街にも言えることだが、メディア等に溢れる都市としてのイメージのはざまには、表には出てこない人々の生活がつまっている。交流人口が増え様子が変わった場所、開発され上書きされていく街並みもあれば、人が去り、忘れられていく記憶もある。街の人々の記憶はこの先どうなっていくのだろうか。

『Walk with Me』は大きく3部で構成される。1つめは、参加者自身が選んだ道をひとりずつウェイと一緒に歩き、その思い出や、好きなものについて、対話する。2つめは、ウェイがガイドとなるツアーをし、人々と歩いた道を、そこで語られた話とともに、ツアー参加者に紹介する。ツアー参加者は、誰かのお気に入りの道を歩く。散歩の追体験だけではなく、ウェイの感覚や参加者とのやり取りの中で生まれた感情、ツアー参加者との新たな対話も重なり、印象や記憶が入り混じる。3つめは、人々との散歩や、ウェイ自身の記憶や記録を展示する。この展示は、地図、参加者と過ごした時間を記録した写真、参加者との待ち合わせの目印に用いた花を集めた花束、参加者から預かった思い出の品、ウェイが滞在中に書いた日記、ウェイの祖父が生前書いていた日記によって構成された。また、ウェイは台湾に帰国後、一緒に過ごした時間について詩を書いた手紙を参加者へ送る。

今後への展望

作家を媒体にして、個々の情景がつながり、つくられる世界とはどんなものだろうか。金沢で始めたこの新しい試みを、彼女はライフワークとしてさまざまな場所で続けようと考えているそうだ。今回は最初の一歩をともに歩み出すことができた。参加者の感

想は後述の通りである。変化や成果については、直ちに現れるものではなく、ウェイの今後の実践と参加者の新しい毎日にいざれ活きてくると信じている。

関係者の声



アイリス・ハング

竹園工作室
マネジメントディレクター/
台湾

私は台湾の新北市にあるアートスタジオを運営しているのですが、2016年のレジデンスプログラムに、金沢のアートスペース「Kapo」のスタジオアーティストが参加してくれました。それがきっかけで、台湾と金沢の交流が始まり、お互いのつながりの中から、今回の『Walk with Me』というプロジェクトが生まれたと思っています。というのも、私のスタジオも国内外問わず、様々な組織と共同しながら、アートを通じた「文化的なイノベーション」を行っているからです。どんなイノベーションもカタチになるのは少し時間がかかるものですし、アーティストたちが人々の心にタネを蒔く瞬間をたくさん見てきたからこそ、「カナザワ・フリンジ」でも同じようなことが起これば、とてもロマンチックだと思います。

ウェイさんは私を含めた3人で住んでいたシェアハウス「サンニンサン」に数週間ほど滞在していました。私たち住人はアーティストとしての彼女の展示を見て、私たちが蓄積してきた思い出の金沢と、彼女が体験した金沢が混じり合つたように思い、幸せな気持ちになりました。

また、ウェイさんのプログラムであるガイドツアーで印象的なことがありました。ウェイさんが紹介してくれる文化施設にほとんど行つたことがなかった私に、冗談混じりに彼女は「ずっと金沢にいたのに、何を見てきたの」と笑っていました。



坂元圭

元サンニンサン住人



北口加奈子

デザイナー/
元サンニンサン住人

ウェイさんとは滞在時のホストとして知り合い、制作の過程を間近に見ることが出来る貴重な日々を過ごさせていただきました。彼女のプログラムは、ありのままの土地の姿やそこに生きる1人1人の普段の生活が投影された、とても自然体で親しみの持てる内容でした。ツアーでは、彼女の目を通して、また

参加者の皆さんとの記憶を通して、新鮮な気持ちで街を歩きました。街の人々と朗らかに触れ合うウェイさんの姿が印象的でした。金沢での滞在、そして私達の古い家と共に過ごした時間が、新たな街を歩く彼女の基盤の一部となれば嬉しいです。

アンケートより

Walk with Me

アート作品の制作と言うともつと敷居の高いイメージでしたので、こうした形で気軽に参加させてもらえるのは意外でしたし、他にはない魅力を感じました。個人が持っている場所に対する想いや記憶にスポットを当てて引き出すという作業、またそれに本人と同じように興味をもつということは、決して簡単ではないし、誰にでもできることではないと思います。何気ないようでいて、ウェイさんの挑戦もあるなと感じました。

今回、ウェイさんに頂いたお花を部屋に飾りました。たった一輪の花ですが、見るたびに、一緒にお散歩した時の会話や風景が蘇ったりしました。私はアートを専門的に勉強したわけではないので、よくわかりませんが、私の部屋の一角で、ただの花ではなく、特別なアートとして存在していたように思います。会場にもそのお花が飾られていたことを知り、人と人、場所と場所、想いと想い、等の繋がりを改めて感じました。

ガイドツアー

みなさんは一様に「楽しかった。」と言います。ただ街を散歩して会話をすることがなぜそんなに楽しいのか。来訪者のアーティストに何かを伝えようと知恵を働かせたり、アーティストも一生懸命受け止めようとする時間が日常的だけどもリアルで創造的な時間だったからかもしれません。言葉の壁が逆に上手く働いたのかなと思います。

地元民だけど、通ったことのない小径を知ることができ、新鮮だった。秘密を話すなども面白かった。シンエンさん、参加者さんとのお話しも楽しく、お天気もよく、よい午後でした。特別な散歩、ハッピーな体験でした。ありがとうございました。

私がウェイさんにいただいたお花は赤いカサブランカですが、白いカサブランカは亡き父の大好きな花でしたので、初対面の時、どきりとしました。偶然でしょうが、その花でなかつたら、また違う展開になつたと思うと花の与える要素も大きいのではと思いました。

大雨になりました。でも心に残りました!!手袋をはめて、静かに歩くのが素敵でした!ガイドツアーに2回参加して、形にならないもの、何も考えない自然が大切だと気づかされました。ありがとうございました!

住んでいるのに行ったことのない道や場所を、また見たことのある所も、住んでいない人の目を通してその人の感性を通して見ることは旅をするような不思議な体験でした。

あさのがわのいえ

聖人と化す異人たち



アーティスト

新人Hソケリッサ! (パフォーマンス/東京)

「ソケリッサ!」は造語で「それ行け!という言葉の勢い、前に進む」という意味を表す。演出を行うダンサー・振付家アオキ裕キが「生きることに日々向き合う身体」を求め路上生活経験を持つ人々に声をかけ、ビッグイシュー基金の協力のもと、2005年よりメンバーを募る。2007年第1回公演「新人Hソケリッサ!」(2007年)をかわきりに、十和田市現代美術館、大野一雄フェスティバルなどに出演。多様な活動を続いている。言葉による振り付け等を行い、個人しか生み出せない体の記憶を形成した踊りは、一般的なダンス概念を超えた景色を創り上げ、多くの人々の共感を呼んでいる。「ダンスは誰でもできる」をうたい人間の持つ純粋な躍動、「生きる力」の復興を目指す。

<http://sokerissa.net>

ディレクター

中森あかね (Suisei-Art)

金沢市生まれ。1998より彗星俱楽部(Suisei-Art) ディレクター。自身のアーティスト活動のほか、1998年-2010年バー&ギャラリーをオープン。アートが身近に感じられるような人とアートをつなげるアートイベント、金沢の歴史や町の伝説など場所の靈性を意識したプロジェクトを企画してきた。Inner child project (金沢市民芸術村)、野村佐紀子写真展(金沢市内8か所)、Absence of the Tea Master (西田巣多郎記念館)、コンテンポラリー茶会の企画(ドイツ・デュセルドルフ、オランダ・アムステルダム)など。2017年金沢市三社町にスペース再オープン。

<http://www.suisei-art.com>


新人Hソケリッサ!は金沢とどう関わる!?
「違和感」が「必然」にかわるとき

北国の閉鎖性と他者に対する警戒心であろうか。金沢はよそ者には馴染みにくい街、と言われる。金沢出身でありながら「外側」にいるような意識で育った中森の経験から、「アウトサイダー」についてフリンジのテーマにしようとしていた時、路上生活経験者のダンスグループ新人Hソケリッサ!の存在を知った。

当初、金沢の路上生活者をリサーチして関連できないかと考えたが、諸事情から彼らと関連付けて路上で開催という案は断念。東京で打ち合わせの際、都会の人ごみの中でも目立つソケリッサのメンバー

の身体に仁王の立ち姿を見、キリスト教の聖人の姿を見、山岳信仰の行者の姿が重なった。

金沢の民間信仰である七つの橋渡りを題材に、この世とあの世の間に流れる川のほとりに住み着いた、この世ならぬ異界のものとしてソケリッサを置くことで、金沢での存在が際立つのではないか。路上生活者たちがそうであるように聖性を持った人々は言葉少なく特異な経験から得た強いオーラを放つ。無言の巡礼、七つの橋、七人の異人=聖人、というキーワードが浮かんだ。(中森あかね)



Program 4

あさのがわのいえ 活動の流れ

金沢に到着した新人Hソケリッサ！ [2016年9月5日]



リサーチ1日目。パフォーマンスは金沢駅に到着してすぐ行われた。[金沢駅]

新人Hソケリッサ！ アオキ裕キ、横内真人、小磯松美のパフォーマンス。 [2016年9月5日]



新人Hソケリッサ！アオキ裕キ、横内真人、小磯松美のパフォーマンス。
この場所はかつて金沢の路上生活者が寝泊りし、金沢駅の新幹線開通工事のため他所に追いやられた場所であり、パフォーマンスを行う意味がある。[金沢駅もてなしドーム地下イベント広場]

ライブ公演 [2016年9月6日]



リサーチ2日目。2014年にソケリッサ！と共に全国14か所ツアーを行った寺尾紗穂を招いて、金沢のギタリスト石川征樹とともにライブを行う。満員の観客を魅了したものとなった。最後に飛び入り参加者と踊った。[金沢21世紀美術館 シアター21]

近江町いちば館前ひろばにて [2016年9月7日]



リサーチ3日目。近江町いちば館前ひろばにて踊る新人Hソケリッサ！小磯松美と立ち止まり見入るひとびと。[石川県金沢市]

あさのがわのいえ 浅野川を渡るパフォーマーと観客

[2017年11月3日～5日]



1回に5名ずつ家を訪ねる形式。民間信仰出発点の常盤橋のたもとで集合した観客は、無言で決して後を振り返らないように告げられる。パフォーマーの後に付いて橋を渡り「あさのがわのいえ」へと向かう。[金沢市]

あさのがわのいえの中でパフォーマンス

[2017年11月3日～5日]



パフォーマーにはそれぞれに部屋が割り振られている。観客はパフォーマー1人の部屋に案内され、彼のオリジナルのダンスを見たあと、ほかのパフォーマー全員の踊りを見ることになる。[金沢市]

音楽家 歌島昌智

[2017年11月3日～5日]



出雲市にて「斎庭(ゆにわ)」主宰する歌島は世界各国の民族楽器とピアノ、声を使った音作りをする。今回は一人一人の部屋での踊りに合わせて打楽器、笛などを駆使し歌島独自の神巫(かむなぎ)音楽による世界感を作り上げた。[金沢市]

金箔のくっついた泥団子を浅野川に投げ込む観客

[2017年11月3日～5日]



パフォーマンスの途中で和紙に挟んだ金箔が観客に配られる。それを持ってメンバーのお腹を触りながら河原に降りた観客は、泥団子に金箔をくっつけて、浅野川に向かって投げるようメンバーに促される。[金沢市]



○パフォーマンス
日時:2017年11月3日(金・祝)、4日(土)
各日11:00～、12:00～、14:00～、15:00～、16:00～
会場:あさのがわのいえ(金沢市材木町27-19)
出演:新人Hソケリッサ! (アオキ裕キ、横内真人、小磯松美、伊藤春夫、平川收一郎、渡邊芳治、西篤近)
音楽:歌島昌智
所要時間:約30分
参加費:投げ銭
定員:各回5名
記録映像:久田歩美
音響:森紀浩(モリラスタジオ)
会場設営アドバイザー:小倉一郎
当日運営協力:田村やすこ、大里宗也

○ゲリラ・パフォーマンス
日時:2017年11月5日(日)11:00～、13:00～
会場:金沢21世紀美術館
出演:新人Hソケリッサ!
音楽:石川征樹

○ソケリッサ!トーク
日時:2017年11月5日(日)14:00～15:30
会場:金沢21世紀美術館 レクチャーホール
定員:先着80名

運営アシスタント:山本美保
協力:あさのがわのいえ、増田美代子、加藤寿美、森仁史(山鬼文庫)、村田屋旅館、皆川智之(NPO 法人ふれんでい)、小坂保行、有限会社ビッグイシュー日本

撮影:池田ひらく(pp.47-51,52上・左下,53上)

アーティスト

アオキ裕キ

新人Hソケリッサ!主宰

参加を決めた理由

美術館から金沢の街へ広く展開し街と人に寄り添うコンセプトを、複数年に渡って丁寧に考察していく形態、及び独自感のある参加アーティストの顔ぶれなど魅力は大きく、一貫した思想を根底に感じます。

プログラムをやってみて

長期滞在をさせていただき、東京で生まれたソケリッサ!という集団とその踊りが、他の地域、環境に立った時にどのような景色が生まれるのかもっと見たいという興味を持つきっかけとなりました。地方にとっても異界の身体であればこそ生み出せる発見や対話のきっかけとなるような展開を目指したいと思います。

今後への展望

とにかく周囲の環境に対しての配慮の必要性を感じます。今回は、隣家の方と密接した住居にての開催であり、単に1週間ほどよそ者が来て騒いで帰ったというような奇をてらうアートのイメージに捉えられる事は避けたいなと感じます。そのためにも芸術に興味のない方へ響く芸術アプローチの意識は常に持たなければならず、一過性でなく継続していける企画の必要性などを感じています。

ディレクター

中森あかね

Suise-Art

プログラムをやってみて

ダンサーとして鍛えられた身体ではなく、路上生活経験者のありのままの身体に価値を見出した新人Hソケリッサ!のアオキ裕キ。リサーチの1年目では金沢市の路上でパフォーマンスを行いました。その反応を見ながら、金沢では東京とは違うアプローチが必要だと感じ、浅野川にかかる七つの橋を渡る民間信仰をもとに少人数の体験型パフォーマンスを提案しました。

それはソケリッサのメンバーが別世界の異人として、空き家「あさのがわのいえ」に滞在し、観客はそこを訪ねパフォーマンスを体験する、というもの。あさのがわ沿いの空き家を下見したアオキが「家の

中に異人達が住んでいる痕跡が必要なので、みんなで一定期間住み込んで、家とパフォーマーの靈気を一体化させたい」と言い、「住む」ことが「存在の靈気を融合すること」、家にも魂があるので、というアオキの考えに中森は共感しました。観客は巡礼の儀式のようなパフォーマンスを鑑賞。緊密な時間を過ごし、最後には解放感とともに浅野川へ降り、配られた金箔を泥団子として川へ投げます。

土地の力や縁を借りる偶發的で不思議な出来事が何の変哲もない金沢の空家で起こる事、そして生きることのリアリティそのものである新人Hソケリッサ!によって、家が特別な場所へと変容したのです。

今後への展望

結果、多くの人がこのパフォーマンスを特殊なものとして捉えていました。「普段のソケリッサ!が見えたかった」という声もありつつ、参加者は年代も職業もバリエーションに富み、「ミステリアス」「神のような存在」「きつねにつままれたような」「浄化されたような」という感想があったことは期待以上でした。

すべての人が靈性を持ち、クリエーターになれる

可能性を持っています。どんな人にも共通して存在する生命の輝きは「尊厳」によって保持され、生きること表現すること、であると確信しています。今後もアウトサイダーとは?その存在意義とは?という私なりの命題を追いかけながら、さまざまな「課題」を「創造物」に変容させ、見せていくことが私に与えられたカナザワ・フリンジの役割だと感じています。

関係者の声



歌島昌智

音楽家/
『あさのがわのいえ』音楽

『あさのがわのいえ』での時間を振り返ると、自分の内側に、あの時間と空間の「氣」のようなものが未だ残っているのを感じます。ソケリッサ!の皆さん、あかねさんをはじめとするスタッフの皆さんと、短い間とはいえ家族のように過ごした時間は、パフォーマンス・アートという領域を越えて、何か不思議な縁と必然を感じる豊かで暖かい時間でした。明らかに異質なはずの自分の存在や発する音が、あさのがわのいえの空間に何ら違和感なく響いていた事も不思議でした。屋根の下に暮らし、それぞれの部屋で始まる踊りそのものが、まさに異界としか言いようのない一つの儀式空間を作り出していく、パフォーマンスを重ねるごとに、いつしか自分自身も浄化されてゆく、その感覚も不思議でした。



石川征樹

ギタリスト/
ゲリラパフォーマンス音楽

ソケリッサ!との初めてのパフォーマンスの時、どんなダンスをするのかと出方を伺っていましたが、いわゆるダンスではありませんでした。不格好な体と沢山の刻まれた皺、一般的に美しいといえるものではないその体がパフォーマンスをすると、今まで味わってきた人生なのか、全てを見透かしたような、諦めのような何ともいえない何かが体から発せられていました。 路上生活で経験されたものが情念となり出ているのか、そこに存在しているだけでパフォーマンスでした。そして路上生活者という事に偏見を持っていた自分が一緒に演じることで偏見が薄らいでいくのがわかりました。今回ることはアートと社会の関わりを考えるきっかけとなりました。ソケリッサ!との出会いに感謝し、また一緒に何かできる日を楽しみにしています。



山本美保

運営協力

振り返ると『あさのがわのいえ』は金沢の地であったからこそ出来たものだとしみじみ感じます。パフォーマンスを観にきた皆さん、来た時とは全く別人のような表情になって家から出てくる光景が今でも心に残っていますが、身近にいた私でも気を緩めたら自分を丸ごと飲み込まれてしまうような、

アンケートより

とてもすてきなパフォーマンスでした。特に演出が素晴らしい、まさに「出会ってしまった!!」感を感じることができました。ソケリッサ!の一人一人の方がすごく体の細部にまで力が入って踊っていて、自分も力がはいってしまった。どんどん吸い込まれていくような感覚で、もう少し知りたいと思った時にはいなくなっていました。良かったです。

ダンスと音楽が今まで体験した事のない異空間を創り上げていた。「〇〇ごっこ」かも知れないがこのまま安らかな気持ちでの世へ連れて行ってくれ(?)と思うほど。もっと観たい。また観たい!

非常に神々しくて素晴らしいです。材木町を歩いて3時から妙な静けさが気持ちよくてパフォーマンスを見て心が洗われました。

ソケリッサ!のパフォーマンスにはいつも何かに憑かれるような魅力があり、終わったあと研ぎ澄まされた感覚になります。

目の前のパフォーマンスはとても迫力がありました。『あさのがわのいえ』という場所も生活(=生きる)というものが感じられてとても良かった。

パフォーマンスをただ眺めていたかったが全体的に「意味」が前に来て動きを見るにあまり集中できませんでした。パフォーマンスを見ている時に「考える」ということをしたくないと思いました。

今秋初めて七つの橋渡りを体験しました。天気に恵まれた浅野川のほとりで音楽とパフォーマンス両方体感できました。ありがとうございました。

神様に会ったみたいでした。私の家にもこんな神様が住んでいるのかもと思いました。

ソケリッサ!のパフォーマンスで初めて見たものだったので、斬新でした。自分の中では婆娑から地獄の世界を描いている様子見えました。歌島さんの演奏に引き込まれました。

きつねにつまれたような不思議な体験。最後に金の紙片がなくなってしまい、現実に戻りました。鈴木清順の「ツイゴイネルワイゼン」の世界。

ホームレス経験者のパフォーマンスという聞いた事のない企画で未知の世界でしたが参加してみて、何を表現されていたのかは主觀でしか考えられませんが、まるで死後自分のしたことやされた事などを走馬燈のように経験するという話を聞いたことがあります。まるでそんなみたいな経験でした。鐘の音を聴きながら、自分の投げた石の沈む川べりを歩くなんて、浄化そのものの?のような気すらしました。なんか不思議な体験でした。

Very mysterious,
mythical, Interesting!
(とてもミステリアスで神話的で興味深かったです。)

アーティストの目

アーティストが見ている 街や社会の姿は どのようなもの？

アーティスト

なかむらくるみ（ダンサー/金沢）

石川県金沢市生まれ。ヨガクラス「くるみヨガ」、放課後等デイサービスや障がい者福祉サービス事業所などで行う「だんす教室」を年齢や性別、障がいの有無を問わず提供している。呼吸、心、身体を丁寧に感じ、大切にする時間を様々な人と共有している。また、2010年8月に松田百世と共に100と書いて「いまるまる」の活動をスタート。石川県から発信するパフォーマンスアートを広める「いまるまるのおどりの公演」を年1回開催している。2016年強度行動障害支援者養成研修基礎研修修了。

<https://100imarumaru.tumblr.com>


アーティスト
村住知也（美術作家/金沢）

石川県津幡町在住。油彩、彫刻、アッサンブルージュを手がける。日常生活の中で遭遇する「とらえようのない不思議な現象」を研究対象とし、我々の世界と平行して存在するもうひとつの世界があるはずだとする解釈のもと、それを視覚化しようと試みている。その他、展覧会の企画、演劇の舞台、福祉施設でのワークショップなどを行う。2013年にはアーティスト・ラン・ギャラリー、THE ROOM BELOWを立ち上げ、美術史の文脈では扱われにくいアーティストとその作品を積極的に紹介し、アートの意味を問い合わせ直そうとしている。

<https://sites.google.com/site/murazumitomoya/>


ディレクター
山田洋平（山田企画）

筑波大学芸術専門学群洋画コース卒業。アーティスト、ディレクター、企画制作、演出家、振付家。2005年より東京にてダンサーとして国内外のアーティスト作品に出演。2010年から2013年はベルリンを中心に活動。2013年石川県に移住。

<http://yoh-hei.wixsite.com/1981>


金沢と、アーティストと、社会との繋がりを探る。

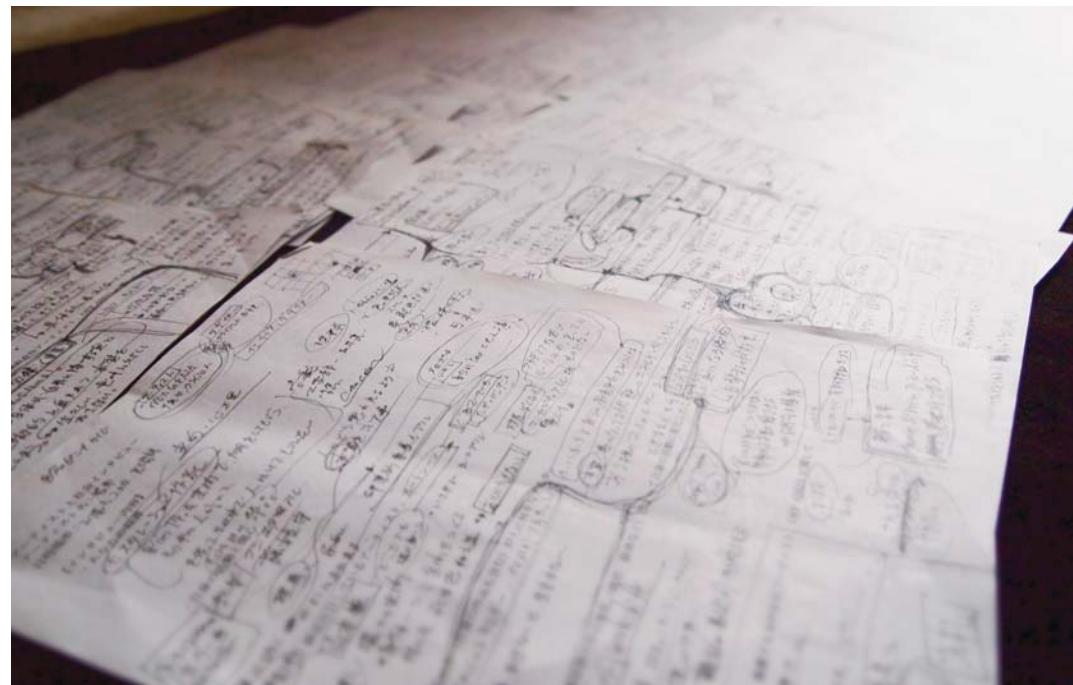
アーティストが、ある街を訪れ滞在制作を行う事は、地域に新しい視点や価値観をもたらし、その土地のアイデンティティを作る事すらある。対して在住アーティストはどのような視点や価値観を持ち、この町や社会を眺めているのであろうか。それを一つ一つ引き出す事で、短期の滞在制作では見つけられない金沢や社会の側面、アーティストと社会との関わり

方が見えてくるのではないかと考えた。

アートとは多様性の認知であり、アーティストとは固定化された価値観に一石を投じる事ができる者、という前提の基、観客・アーティスト・作品の関係者それぞれに新たな視点や気づきが生まれる事を期待して、プロジェクトを開始した。（山田洋平）

2016年 調査

アーティスト・インタビューのメモ [2016年5月～9月]



金沢を拠点に活動するアーティスト24名にインタビューを行った。その中でアートの市場も含め多くの人に受け入れられる作品を作るのはではなく、社会や既成の価値観を超えて自身の信じているもの、見えているものに殉じようとするアーティストの姿が見えてきた。その独自の視点や態度を『アーティストの目』と名付け、拾い上げていく事で、金沢や社会の価値観に一石を投じられるのはと考えた。[石川県金沢市及び周辺都市]

ワールド・カフェ [2016年9月3日]



金沢にいる多様なアーティストや市民20名ほどに集まってもらい、「自分が制作(仕事)をするうえで大切にしていること」、「それが金沢というまちと関係があるか」について話しあう、「ワールド・カフェ」(※)を行った。意見の交換自体は活発に行われた反面、金沢で創作を行う上での消極的・保守的な意見が多く並び、アーティスト側・鑑賞者側共にある種の閉鎖性を感じている現状が明らかになった。
[金沢21世紀美術館 茶室 松濤庵]

※Juanita Brown(アニータ・ブラウン)氏とDavid Isaacs(デビッド・アイザックス)氏によって1995年に開発・提唱された。カフェのようなカジュアルな雰囲気の中で話し合いを行う事で、新たな繋がり、知恵、知識を創発するための話し合いのスタイル。何かを決定するためや、議論するための場ではなく、その場に集まつた人間がどのような考え方で活動を行っているかを知るための場を形成する。<http://world-cafe.net/about/>

Program 5

アーティストの目 活動の流れ



村住知也

美術家としての活動の他、石川県内の福祉施設で美術教室を開催している。教室は元からあったものではなく、村住が美術教室の必要性を施設に訴え実現したもの。福祉活動としてよりも、障がい者の作り出す造形物への羨望と、彼らから得たいものがあるという動機から始めたという。村住が障がい者を通して見ている世界を取り上げるべく、2017年度に創作を依頼した。



なかむらくるみ

創作活動の他、石川県内の福祉施設でダンス、ヨガ教室を開催している。原点に立ち返れる事を大切に活動する中、施設利用者の動きに魅了されてきたという。障がいという一つの事象も、アーティストの目によって全く違う側面が見られる事を期待すると共に、長い期間金沢に住むことで作り上げられてきたコミュニティや活動が作品へと還元していく事を重視して、2017年度に創作依頼をした。

展示・パフォーマンス会場 [2017年11月3日～5日]



『Under the bed』(村住知也)、『彼らの特徴とその理由』(なかむらくるみ)の2作品の展示・パフォーマンスを行った。[Kapo・金沢市]

Under the bed(一部)



創造的な性質を持ちながらも様々な理由により公の下に現れづらいもの、作家が他者へ感情や情報の伝達を求めずに作りだす造形物を「内密の創造性」と呼び、多くの場合、自らの人生と真摯に向かい合う態度から出発し、生活と制作の調和が生み出した結晶のようなものと捉えた。
(村住知也、『内密の創造性』より抜粋)
造形物と、それらからインスピレーションを得て作られた作品を展示した。
[Kapo]

彼らの特徴とその理由 [2017年11月3日～5日]

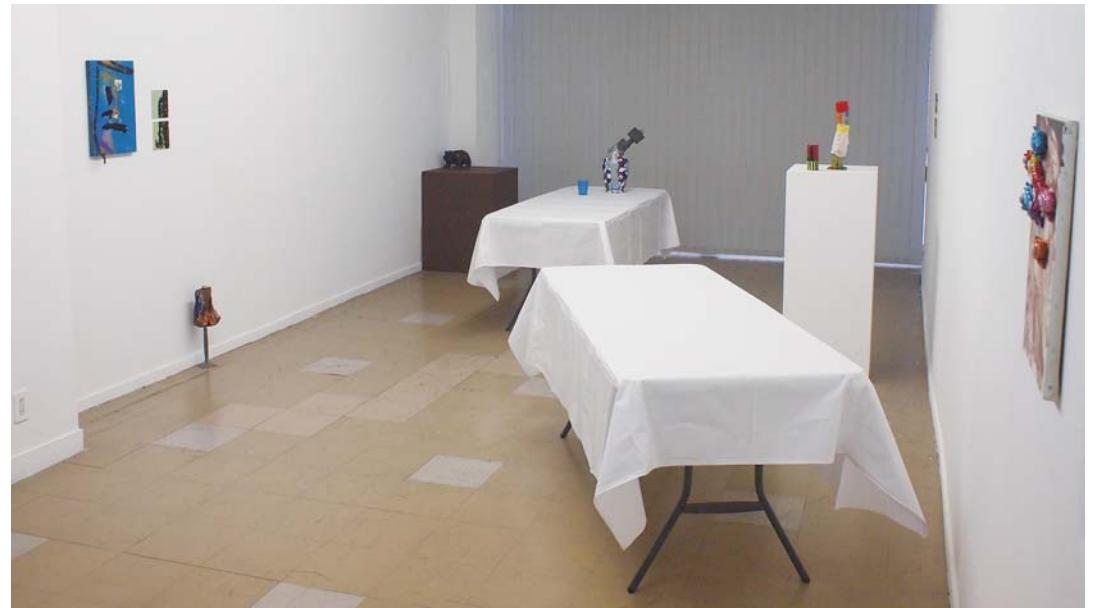


人種や老若男女、障がいの有無を問わず様々な人の持つ特徴について質問をした映像作品。特徴の理由や、特徴に対する本人の考えは多様性に富んでおり、見る者の想像を超えて存在していた。人と人を区別する枠組みがいかに曖昧なものであるか体感できる作品となった。[Kapo]

彼らの特徴とその理由 出演者達



目の前にいる人の何気ない動きをじっくりと見て味わう事で気づく美しさや魅力を体感する作品。そこには「見てはいけないものは一つもなかった。今回の企画をきっかけとして、なかむらは障がい者と協働した創作を続けていくという事。村住は創造性の源はもしかしたら生物的な欲求に近いものかもしれないと考え、リサーチと創作を行っていくという事だ。[Kapo]



○『彼らの特徴とその理由』パフォーマンス
日時:2017年11月3日(金・祝)～5日(日)
4日(土) 各日13:00～、14:00～
5日(日) 13:00～
会場:Kapo(金沢市野町3-1-27)
出演:なかむらくるみ、青柳隆生、魚琳太郎、
大家港生、久保明己、坪田祐佳、本多紫苑
所要時間:約30分
参加費:300円
定員:各回10名

○『17名の特徴とその理由』映像展示
日時:2017年11月3日(金・祝)～5日(日)
各日10:00～17:00
会場:Kapo(金沢市野町3-1-27)

○『Under the bed』展示
日時:2017年11月3日(金・祝)～5日(日)
各日10:00～17:00
会場:Kapo(金沢市野町3-1-27)
作品提供:高宮美由紀、鈴見邦夫、竹中栄三、中田直人、谷口能嵩、林毅、
藤原晃弘、藤原純治、船橋映、山下真次、米沢実、ほか(敬称略・順不同)

当日運営協力:ひらたひさこ、ひらたそら(敬称略・順不同)

協力: 特別非営利活動法人地域支援センター「ボレボレ」、愛育学園、
ふじのき寮、石川県立錦城学園、鈴見台虹の家、三谷の里ときわ苑、
エイブルベランダBe、他(敬称略・順不同)

撮影:池田ひらく(pp.62上,63上,64,66-67)

アーティスト

なかむらくるみ

ダンサー

参加を決めた理由

ディレクターの山田さんよりお話を頂いた際、これまで自分自身の心の中で、いつか形にしたいと思っていたことを実現するきっかけになると感じたためです。また過去に観客としてフリンジに参加した経験から、1人でも多くの方に作品を観てもらい、考えを深めてもらうことができる場だという思いがありました。地元開催も嬉しかったです。

プログラムをやってみて

テーマを明確にし、出演者に依頼をし、決定した出演者に作品の趣旨や内容を伝え、と段階を踏んでいくにつれて、何を発表したいかが、よりハッキリしていきました。どの段階でも、自分の思いを言語化して相手に伝えることに苦労しましたが、個人ではなくディレクターの下でという製作環境のおかげで、どうすれば伝わる作品になるかを常に考えることができました。

今後への展望

私の周囲には、魅力的な特徴を持つ方がまだまだたくさんいるので、また作品を発表できればと思っています。出演者は普段通りの姿で、観客もそれをじっくり味わう。互いに肩の力を抜いて、素直な気持ちでその瞬間を楽しむことができるような作品を作っていく。障がい者、健常者という言葉で人を隔てず、日々関わる一人一人との関係を大切にしていきたいと思います。

村住知也

美術作家/金沢

参加を決めた理由

2016年のリサーチで私の制作、活動について話をする機会がありました。ディレクターの山田さんは熱心に話を聞いてくださり、建設的な意見交換を重ねたいと言ってくれました。そして私はアウトサイダー・アートと呼ばれる概念を広く紹介し、福祉とアートの接点を展覧会を通じて視覚化したいとの思いから参加をしました。

プログラムをやってみて

福祉の現場では、個人を浮かび上がらせるに困難な状況がいくつもありました。たとえば作家の名前の表記や作品借用に関わる扱いについて気長な事務手続きと丁寧な配慮が必要でした。それでもなんとか展覧会場に作品を持ち込みたいという強い目的意識と誠意が、関係者に理解され展覧会を実現することができました。

今後への展望

フリンジ(周縁)に焦点を当てたこの度のプロジェクトを通じて、アートの持つ幅広い可能性にあらためて気が付きました。それは今まで別々のモノであったり関係のないと思われてきた間柄を縮め、同時代的な感覚、意識を喚起させました。実はフリンジにこそ、そうした気付きのエレメントがあるのだと思うようになりました。

ディレクター

山田洋平

山田企画

プログラムをやってみて

金沢が創作活動の拠点(Hub)となることを長期的な目標として実施したカナザワ・フリンジ。創作活動の拠点として理想的な環境とはどんなものかを考えるために行った1年目の調査では、個々の持つ思想や哲学に捉われがちであり、自分が理解できない他者の思想や哲学を理解しようとする態度に消極的である人や街の雰囲気を感じた。

それを受けた2年目には、多様な個性を持つ人々を肯定的に捉え活動を行っている村住、なかむらの2名に創作を依頼した。2名の作品に共通して言えることは、障がい者に何か特別な事をさせるのではなく、日常の中で行っている事をいかに人に見せるかに照準を絞っていた事である。多様な個性を整えて発表するのではなく、そのままを提示した2名の作品は多様性への認知そのものであり、無意識に固定化された価値観に一石を投じる事になったと思う。それは2名のアーティストが長年福祉施設に携わってきた中で築き上げてきた信頼や信用が基と

今後への展望

今回の2名のアーティストが行ったことはとても小さな事だと考えている。だがアーティストの目がなければ見られない世界であり、気付きであり、変革だと思っている。

一般に日本でアートは鑑賞者や参加者にとってエンターテインメントであり、非日常に浸る場と捉えら

なっており、またそのままの姿に美点を見出したアーティストの目がそこにあった。結果、障がい者と健常者を分ける境界線は何かを考え、明確なラインがあると思っていた事に不確かさを与える事ができた。

裏話として、アーティストと共にリサーチをしている中で、「障がい者に美点を見出す事自体が、障がい者に偏見がある証拠」と言われた事が方向性を定める上でのターニングポイントとなった。今取り扱おうとしているものが何かを深く考えるきっかけとなる多くの示唆を含んでいる言葉だった。

また、今回の企画を通して金沢21世紀美術館が非常に信用のある施設であるという事を多く感じた。個人レベルの活動では難しかったであろう場面でも、美術館が主催であるという事で信用を得られた事もあった。個人で行う事で可能な事もあるが、組織が行う事で可能になる事もあると感じた。

れているが、アートには世界を検証し、分析し、関係する人間や社会を変革する力を持つ一面がある。

刹那的な快感に終始するのではなく、長い間くすぶり続けるような形態のアートをカナザワ・フリンジで提示できたと思うし、この火種を絶やさずに静かに燃やし続けようと思っている。

関係者の声



魚琳太郎と母

『彼らの特徴とその理由』出演

言葉や空気で伝えあう社会の中で難しさを本人も感じているのだろう。パフォーマンスで、彼の考える自分を、人と違うところをお客さんの前でアピールできてすっきりしたようだった。何も規制されることなく、自分を表現できる経験が

本人の自信につながればと思うている。そのままで良いといった、なかむらくるみさんやスタッフの姿勢にも共感できた。機会があれば、また参加したいと本人も言っている。楽しい経験だったようだ。



坪田祐佳と母

『彼らの特徴とその理由』出演

ヨガやダンスをいつも一緒にしているくるみ先生からフリンジのお説教を受け、くるみ先生とたくさんお話をし、自転車に乗っている姿をビデオに撮ってもらい、そしてみんなでステージの練習をして、お客様の前で本番をやって。どれも楽しかったです。

振り返るとどの時もほっこりとした時間で、特にステージ練習、本

番ではくるみ先生がみんなを包んでくれていて、そしてみんなは包まれている安心感の中で緊張はするもののリラックスしてパフォーマンスが出来、お客様にもとても近い感覚で参加してもらえたのかなと思います。身構えるものではなくありのまま自然なものとして笑いもあり、くるみ先生の素敵な世界観だったなと思います。



ひらたひさこ

運営協力

わたしは、運営スタッフとして16歳の娘と関わさせていただきました。ダンサーであるなかむらくるみさんの映像作品にパフォーマンスに登場するメンバーにも直接お会いすることが出来

ました。村住知也さんが1Fで展示する作品の作者の方々も施設の方やご家族と多く来場されました。その様子が、わたしたちからはひとつの舞台のように見えていました。楽しくて平和でときどき涙が出てくるような…わたしと娘は、すっかりその世界に浸つて、帰宅のバスの中や朝、目覚めたときも、忘れない光景が愛しくて何度も思い返したほどです。2日目は、1本の傘を2人で差し土砂降りの雨の中、溢れる気持ちを語り合いながら帰りました。

なく今を生きようね。じぶんを生きようね。それがどんなに周りを幸せにするか、この人たちが教えようとも伝えようともせず、ただ今を、じぶんを、懸命に生きてわからせてくれているよね。」

感覚としてわかっていたことが、視覚としてはっきりと人生に刻まれたことにわたしたちは感動していました。そして「ホワイト企業だよね！」と。目に見えない部分にも、ちゃんと心が宿っている企画であるとわたしたちにも伝わりました。

アンケートより

いろんな人の考え方というか、頭の中をのぞいているような、人の話を聞くのが好きな自分にとって、とっても合った展示とパフォーマンスでした。普段考え込むことが多く、少し憂鬱で心が重いまことに来たのですが、展示やパフォーマンスを見てなぜかわからないけど心がすっと軽くなりました。パフォーマンスも一人一人のやさしさや考えが伝わってきて、やわらかい気持ちになりました。みんな仲がよくていいなあと思いました。友人から勧められて来たのであまり詳細は知らずに来ましたが、来られて良かったです。

パフォーマンスでは深く考えさせられるところというよりはとにかく楽しめた。その後で少し考える部分があった。人はそれだけれども、その特徴を尊重しあわいに思いやっていく事で対立も乗り越えられると感じた。それぞれがあるから、やさしさが生まれると、とてもあたたかく心がグッとつかれた。ニコニコしている皆さんを見てこちらもうれしくなった。楽しくなった。笑顔になるパフォーマンス、とても素敵でした！！

普段、意識しない事(歩く、身体の好きなところを味わう)をあらためてやってみると新鮮だと思った。自分もやってみたい。身体で表現するって生きている事の喜びだなあとあらためて思った。音楽もとても楽しくて、演者のみなさんが楽しんでいるのが伝わってきてよかったです。私も私にできることを無理せず表現していくたいです。愛いっぱいでした。ありがとうございました。

来て、見て、会えてよかったです。あんやと～！

ずっと見ていたくなる映像でした。いろんな人の言葉や笑顔でとても幸せパワーをもらいますね。それと、おもしろくてついつい沢山笑っちゃいました。私もまわりの友達や知り合った人たちの特徴をさがして聞いてみたりしました。素敵な時間をありがとうございました。ありがとうございます!!!

とても楽しかったです。もともと文を書くことが好きで表現することが好きなので、今後の参考にさせていただきます。パフォーマンスの「皆を巻き込んで」「一体となれる感じ」がとても好きです。これからも、していただく機会があれば是非行きたいと感じています。ありがとうございます。

目の前にいる「人」という存在がどれだけ大切か…。なんだか温かくなったり。彼らが自分の特徴を答えていく姿を見て、自分と向き合う事の大切さを改めてじんわりと感じた。私はずっと悩む事がいいことなのか悩んできたことがあって、自分と向き合う事を避けていた時があった。自分と向き合つて自分を知り、そのために悩むことも大切だと思う。いろんな事を教えられる作品、映像、パフォーマンスで心に残った。

ディレクターによる座談会

「アートな視点で、金沢の課題や人、そして場所と向き合う」

そんなコンセプトで始まり、2年サイクルで創作活動を行っている「カナザワ・フリンジ」。

国内外で活躍する5名のアーティストと、金沢で活躍する5名のディレクターたちが、

それぞれパートナーを組み、綿密なリサーチのもと新作発表に至った

「カナザワ・フリンジ2016-2017」が、幕を閉じました。

「周縁」という意味を冠に掲げ、金沢という街に、

そして関わった一人ひとりの心に、どんな変化をもたらしたのか。

その軌跡を、改めて振り返ってもらいました。

(構成・文:喜多舞衣)



出席(左から):上田陽子、山田洋平、齋藤雅宏、黒田裕子、中森あかね、喜多舞衣(進行)

(2017年12月13日、金沢21世紀美術館 会議室1にて)

「私」と「あなた」の 関係性でつくる、濃密な体験

喜多:今回、みなさんのプロジェクトを俯瞰的にみてみると、“自己との対話”というのがキーポイントになっていたなと思うんですね。例えば、『TEI-EN Bento Project(以下、TEI-EN)』や『あさのがわのいえ』は、その世界観に入り込んでいくことで、参加者が自己対話をしていくスタイル。一方、『Walk with Me』や『Fun with Cancer Patients(以下、FwCP)』、『アーティストの目』は、他者との対話を通じて、自身を反省していくスタイル。アプローチに多少の違いはあるど、どれもがコンセプチュアルで、没入感がありましたよね。だからこそ、参加したオーディエンスは、楽しみながら一つの間にか作品を通じ、自身を見つめるという構図が生まれたんじゃないかな、と。

そんな「カナザワ・フリンジ(以下、フリンジ)」に、みなさん一人ひとりがディレクターとして、時には参加者として関わってみて、今、どんなことを感じていますか?

中森:5人5様のアプローチがあって、バリエーションもあったので、私は純粋に楽しかったですね。

山田:参加者という部分では、メディアには「最小限のフェス」と書かれたりもしましたよね。1回あたりの定員数が少ない作品が集まったからこそ、ものすごく密度が濃かったんじゃないかな。

上田:たしかに、閉幕したにも関わらず、余韻と関係性がいまだに継続している気がしますね。例えば、山田さんのプログラムに参加していた方が、私の運営している「金沢アートグミ」にふらっと遊びに来ていまだにフリンジの話をしたりするし。アーティストの稻田さんとも、「じゃあ、また!」って言って、駅で別れましたからね。また会う前提で(笑)。

黒田:なんか、いい意味で「しぶとい」感じですね。それが。

山田:だからこそ「これからどうしよう」と考えてしまうことって、ないですか?

中森:それ、よくわかります。『あさのがわのいえ』に関わった新人Hソケリッサ!の中に現役で路上生活をしているメンバーがいて、彼らがふと不安を漏らしたことがあったんですよ。「ここでの生活が楽しすぎて、路上に戻れるだろうか」って。もちろん、本人たちが路上での生活を望んでいるにしても、彼らの姿を想像すると、途端に胸がザワザワしてしまう。そんな自分がいるんですよね。

黒田:私も余韻を引きずっといます。それぞれがいろんな人たちの人生に関わったわけですよね。アーティストだけじゃなくて、アートが身近になかった方たちと一緒に何かをつくりあげていく。関係ができれば情も生まれるし、ある意味責任も生まれてくるわけで。FwCPは金沢や英国のチームだけではなく、リサーチに協力してくれた県外の団体や個人の方もいます。これで終わりというより、むしろここからスタートという感覚がしつくりくるのかな。

齋藤:今回、オーディエンスとして参加したときに、特別な印象を受けたんですね。普通、芸術祭などのアートイベントでは建物や景色を楽しみながら、街巡りとともに作品を楽しむスタイルが多いじゃないですか。でもフリンジは、小規模で非常に濃密な体験をする作品が多かったからこそ、1日1作品みたら、正直「もう十分」みたいな(笑)。なので、今後は期間を延ばして、一つひとつをゆっくり巡ってもらえるような構成にするといいのかなとも思いましたね。

参加者は傍観者ではなく、 「作品の一部」であるということ

喜多：なるほど。実際、どんな方々が参加されていましたんでしょう？



中森：私の場合は、「ソケリッサ!を見に来た！」というピンポイントで来られた方も含め、コアなアート好きや学術的な専門家たちが来てくれたのが、嬉しい誤算だったかな。

齋藤：フリンジ自体、そもそもの設定として「金沢の人たちに来てほしい」、「積極的に関わってほしい」というコンセプトがあったので、そういう意味で地元の参加者が多かったのはよかったです、と思いましたね。

黒田：たしかに。FwCPの場合、アーティストを英国から招聘し、リサーチで県外にも足を延ばし、医療関係者のネットワークを通じて広く発信できたため、県外からわざわざ来てくださった来場者も多かった気がしますね。とはいってFwCPは、がんがテーマで、聞いた時点で敬遠する人もいるんだろうなって予想していました。だからまずはFwCP金沢メンバーから派生して、いつの間にか知らない人まで広がって来場してもらえたらしいなと思っていました。でも、当日会場の前を通りかかった人に声を掛けたら、ふらつと入ってくれる方が多くて嬉しかったですね。アメリカ人のがん専門医がたまたま来場してくれる

など、予想外のミラクルな出会いも生まれました。

山田：それで言えば、僕の担当した『アーティストの目』は、FwCPとは全く逆ですね。観客は10名限定の予約制。入場料も設定して、あえて当日の飛び入りができないようにしたんですね。なぜなら、参加者にも、「自分は今、この場に参加しているんだ」という意識を持ってほしかったから。傍観者としての観客ではなくて、自らも空間の一部であると自覚することで、一緒に空間をつくりあげていけたらなと思っていました。だから、参加者一人ひとりに、目の前で起きていることやその背景をじっくり考えてもらえる場になったんじゃないかなって、思っています。

知らぬ間に引いていた、 「中心」と「周縁」の不確かさ

喜多：すると、フリンジのキャッチコピーである、「周縁から、動き出す」ということが、実際に起きていた、というふうにも聞こえますね。ただ、ここで面白いと思うのは、「誰が」「何が」「どこで」「どうやって」「なぜ」動き出すのかが、明言されていないところ。これぞまさに、既成概念や価値観を超えた創造と変化を表していると思うのですが、みなさん自身が感じた概念や価値観の「変化」を聞いてみたいです。



齋藤：僕の担当した『Walk with Me』は、散歩

するという行為が作品の要素の一つですが、散歩は「自己を発散するための自由時間」と捉えることができますよね。でも、日常生活の中では「悠長なこと言ってないで、さっさと仕事しなきゃ」みたいになってしまいます。そういった日常の中にあるひそやかな時間や出来事、社会的な小さな問題を見過ごさず、ディレクター陣が着目し、アーティストと協働して作品とし、提案した。そこが今回非常に重要だったなと思っています。だから、社会や土地、街、人、美術館、アートなど、それぞれの関係性や深度によって、「周縁」って違うふうにみえるんじゃないかな、って考えるようになったというか。

上田：それ、私もすごく感じましたね。TEI-ENにおいて、郷土料理の大御所である青木悦子先生を「中心」に見立てて進めていたんですが、そんな彼女から、まさかの「アップル治部煮」が提案されたということもあり(笑)、「あれ、中心だと思っていたことが周縁になってしまふこともあるのでは？」なんて思ったりしました。

中森：ソケリッサ!のダンサーって、普段は食べ物とかグラビアアイドルの話しかしてないおじさんたちなのに(笑)、踊るといきなり「なんであるに面白いの?」って。そう思うと、人はみんなクリエイターになり得るというか、その人の在りよう自体全部違うわけだから、誰でも作品になりうるんじゃないかなと思ったり。



山田：まさに、僕はずっとその問いに向かって

いた気がしますね。障がい者、健常者、アートのボーダーラインはどこにあるんだろうって。自分が無意識に区別してしまう部分って、どこなんだろうって。

黒田：山田さんが言うように、自分の視点をどこに置くかで、中心と周縁の逆転が起きるわけで、そのボーダーがすごくぼやけた気がするんですよね。今回改めて感じたのは、私たちの生きている社会は、ものすごくバリエーションがあって、マスで全部括れるほど均一じゃないですよね。にも関わらず、便宜的に、行政的に、資本主義的に、あるいはマスメディア的に、いろんな要因で「括られた社会の均一性」が存在しているんだなあって。それで、自分もいつの間にか感化されて、「均一の目」で相手や物事を括るようになっている。だからこそ、多様性とか、異なることに対する恐れ、あるいは、自分のアイデンティティを何かに頼る所属意識の強さをより強く感じましたし、ひるがえって、日本社会や文化、日本人としての在りようを意識せざるをえなかったですね。

誰もが「ありのままの自分」を 自己肯定できるきっかけに

喜多：ここで、もう一度フリンジ全体に立ち戻ってみると、金沢という土地で暮らすディレクターたちが、生身の自分で感じる身近なテーマを扱っていること。かつ、その作品を見て触るという行為で終えるのではなく、対話や体感という一步踏み込んだ関係を通じて、アーティストやディレクター、参加者の人生の一部が、クロスしたりつながったりする深度の深さ。それにより、境界線やボーダーラインという概念は、実はものすごく不確定なものなんじゃないか、ということに気付かされたようなプロジェクトだったように思います。そんなフリンジは街にとって今後どんな存在になっていくのでしょうか。

次のページに続く→

齋藤：街の人たちにとって、美術館やアートが自分たちの日常やアリアリティと結び付いているんだ！と発見してもらえる一つのきっかけになつたらいいなって思うんですよね。というのも、美術館やギャラリーで、どれだけ私たちの日常にリンクするような作品を紹介したとしても、長らく美術館に足を運んでいない人や、そもそもアートに縁遠い人にとっては、「無関係」、「知らない」と思われてそれで終わりじゃないですか。でも、「オープンまるびい（※）」のように、すごくウェルカムな雰囲気だと市民も美術館へたくさん来ていましたし、だからこそブライアンと黒田さんがやったように、市民活動をしている人たちの中に、フリンジとしてどんどん入っていくアプローチも必要だなって思いましたね。

山田：自分の日常やアリアリティと結びつく。それ、ほんとにそうですよね。「がんとアート」とか、「お弁当とアート」が結びつくなんて思ってもみなかつた！という声が、あちこちからあがってましたし。

中森：なるほど。ただ、私は「美術館に来たことでアートに触れられるんだよ」というよりも、むしろ「その人の日常 자체がアートなんだよ」ということが伝えられたらいいなとも思いますね。



上田

上田：たしかに。だからこそ、一緒にタッグを組んだアーティストにも、また金沢に来もらって滞在してほしいですね。アーティスト・イン・レジデンスって、普通は滞在して終わったら、さようならっていう感じじゃないですか。でもフリンジはちょっと

と違う気がしていて、「また会いましょう！」っていうつながりができたら面白いんじゃないかな。

齋藤：そうですね。金沢のフリンジは、アーティスト・イン・レジデンスであるということが大きな特徴でもあるわけだから、アーティストと地元の人たちとの関係性が、友達のような、ソウルメイトのようなものになって続していくと、楽しそうですね。実際、FwCPのキーパーソンになった、はなうめの木村さんたちも「自分たちの活動に誇りが持てて、今までやってきてよかった」と言ってましたし、『Walk with Me』でウェイさんと一緒に散歩した方も、「自分の人生を振り返り、自分を見直すいいきっかけになった」と言ってましたね。関わってくれた人たちが、「ありのままの自分」を自己肯定できる時間を生み出せた、っていうのがすごく良かったかなと思っています。誰かに言われるんじゃなくて、それがフリンジに参加することで、自分自身で気付き、自分にプライドを持てる。そんなきっかけをつくるのが、フリンジの意義なんじゃないかなって。

黒田：それをつなげるのが、私たちディレクターの役割なんだろうなとも思いますよね。同じ土地に暮らす、ある意味、参加する側にとって近しいディレクターがいるというのがフリンジの強みかな、と。実際、中森さんのプロジェクトでは、ディレクターからアーティストへ伝えたインプットの量がものすごく大きくて、その熱量と情報量がオオキさんのクリエイティビティを加速させたということもあったので、作品の作りかたも一様ではないな、と改めて感じました。

喜多：何かを建てるとかつくるという有形のデザインではなく、心のつながりや自己のプライドをまちに残していく、アーティストがいなくなつても、そのまちに住んでいる人たちが、自分たちが心地よく暮らす・生きるためにどうすべきか。そんな命題を問うような、無形のデザインをしてい

くコミュニティデザインにも、通ずる部分があるようになりますね。



黒田

黒田：誰かがやてくれるじゃなくて、金沢にいる自分たちがコトを生み出していけると自覚すること。今よりさらに強い動力となって、金沢のあちこちで勝手に何かが生まれ面白いことが起きていけばいいな、と思ってるんですね。そういう意味で、フリンジがイベントとしてずっと続くことが目的なのでなく、一つひとつの濃いプログラムができる、展開したり継続していく中で、また新たな課題や動きが生まれてくる。そうやってどんどん派生していきながら、いずれ主催者としての美術館の役割自体も終焉を迎えていくみたいな。そういう育ち方をしていくことができればいいなと思っています。

だからこそなんですけど、次のサイクルでは、もうちょっとハプニングや事件が起きてもいいかもしないな（笑）。危険を冒したほうがいいという意味ではなくて、社会や土地的に「アンタッチャブル」な部分や気づいていないことって、もっとあると思うんです。経験値を増やしてさらに大胆になって、フリンジというプロジェクトが展開できるといいですね。

※金沢21世紀美術館では毎年10月に「市民美術の日」という、金沢市民が美術館主催の展覧会を無料で見ることができる日を設けている。2017年度は市民美術の日「オープンまるびい2017 朝も夜も美術館」と題して特別企画を各種開催し、その中にはフリンジの『金沢奇妙弁当』の販売や、「聞かせて、あなたの『金沢』」も含まれていた。

「カナザワ・フリンジ」の歩み



2016

AIR21:カナザワ・フリンジ 2016

2016年6月11日(土)~2016年9月11日(日)

5人のディレクターが国内外より招聘するアーティストやクリエイターとともに7つのリサーチプロジェクトを実施。

リサーチの一環として、ワークショップやトークなどの公開イベントを開催した。

第1期	第2期	第3期
6/11(土)~6/19(日)	7/23(土)~7/31(日)	9/3(土)~9/11(日)
黒田裕子	上田陽子	
【We Have to Talk About Cancer (がんについて語ろう)】 アーティストトーク&デモンストレーション アーティスト:ブライアン・ロペル 日時:2016年6月17日(金) 19:00~21:00 会場:金沢21世紀美術館シアター21 協力:がんとむきあう会	トーク「滞在制作をめぐる対話—私たちはどこに「滞在」しているのか」 登壇者:居原田進(アートアクティビスト)、住康平(アーティスト)、長谷川新(インディペンデント・キュレーター)、土方大(アーティスト、インストーラー) 日時:7月24日(日) 15:00~18:00 会場:金沢21世紀美術館 シアター21	【食べる】KANAZAWA妄想レストラン TEI-EN シェフ:稻田俊輔 協力:四井雄大 / 住人の振る舞い TEI-EN オープニングパーティー 日時:9月9日(金) 18:30~20:00 会場:shirasagi / 白鶯美術(金沢市柿木畠) シェフトーク試食付き 日時:9月10日(土) 15:30~16:30 会場:金沢21世紀美術館 シアター21
齋藤雅宏		【考える】レクチャー「ソーシャリー・エンゲイジド・アート:金沢におけるアーティスト・イン・レジデンスの可能性」 講師:秋葉美知子 (NPO法人アート&ソサイエティ研究センター リサーチャー) 日時:7月30日(土) 14:00~15:30 会場:金沢21世紀美術館 松涛庵(お茶室)
中森あかね		【踊る】路上にて・Sokerissa! On the street in Kanazawa アーティスト:新人HSケリッサ! 路上パフォーマンス 日時:9月5日(月) 13:00~15:00の間随時 金沢駅東もてなしドーム地下広場 9月7日(水) 10:00~11:00 近江町いちば館広場 9月7日(水) 18:30~20:30 いしかわ四高記念公園(旧 中央公園) ゲスト:石川征樹(ギター・7弦のみ)
【トース、そして発見】プレゼンテーション アーティスト:マークサーチ 日時:2016年6月15日(水) 19:00~20:30 会場:金沢21世紀美術館シアター21	展示「まちのかおプロジェクト:金沢桜町編」 アーティスト:マークサーチ 展示期間:7月31日(日)~8月31日(水) 展示場所:山鬼文庫近く、田中家具センター角の町内掲示板 オープニングパーティー 日時:7月31日(日) 15:00~18:00	【ライブ】 日時:9月6日(火) 18:30~20:00 会場:金沢21世紀美術館シアター21 出演:新人HSケリッサ!、寺尾紗穂(歌・ピアノ)、石川征樹(ギター) トークセッション 日時:9月8日(木) 19:00~21:00 会場:ダイニングバー不二(金沢市材木町) ダンスワークショップ 日時:9月10日(土) 13:30~15:00 会場:金沢21世紀美術館 シアター21
【知る・考える】金沢のアーティスト・イン・レジデンス 日時:9月11日(日)〈1部〉13:30~14:30 〈2部〉15:00~18:00 会場:金沢21世紀美術館 シアター21	山田洋平	【話す】地域社会とアート:ワールドカフェ開催! 日時:2016年9月3日(土) 16:00~17:30 会場:金沢21世紀美術館 松涛庵(お茶室)
〈1部〉基調プレゼンテーション:ソウルのケーススタディ スピーカー:ジサン・パク(プロデューサーグループ・DOT / 韓国) 〈2部〉「金沢のアーティスト・イン・レジデンス~ディレクターズレポート2016」 スピーカー:上田陽子(金沢アートグミ)、黒田裕子(金沢21世紀美術館)、齋藤雅宏(Kapo)、中森あかね(Suisei-Art)、山田洋平(山田企画)、ファシリテーター:高橋洋介(金沢21世紀美術館)		

2015

Museum × KNZ Fringe ~街と、人と、出会う

2015年6月8日(月)~2015年10月11日(日)

英国のアーティスト主導型コミュニティ「フォレスト・フリンジ」から選出したアーティストを迎えて実施。金沢の文化や歴史に触れ、地域と交流しながら新作のアイディアを練り上げる第1期と、日英の参加者が協同して新作を創作し10月10日、11日に上演する第2期の2段階で実施した。その後、以降2年サイクルで実施していくことを決めた。

第1期クリエイティブワークショップ(6/8~6/22)

会場:金沢21世紀美術館 シアター21

アーティストが自身の活動内容や作品を紹介するとともにミニワークショップや参加者との意見交換を通じて、クリエイションの可能性を探った。

1. 中森あかね (Suisei-Art) 日時:6月10日(水) 10:00~12:30
2. 松田若子(能楽師) 日時:6月12日(金) 13:00~17:00
3. 中安翌(インタラクティブアート・映像) 日時:6月13日(土) 17:00~19:00
4. 金沢舞踏館(舞踏) 日時:6月14日(日) 14:00~17:00
5. スコッティ(パフォーマンス) 日時:6月15日(月) 19:00~21:00
6. 金津史佳(服飾) 日時:6月16日(火) 10:30~12:00
7. ニック・グリーン(パフォーマンス) 日時:6月16日(火) 19:00~21:00
8. アクション・ヒーロー(パフォーマンス) 日時:6月19日(金) 19:00~21:00

第2期(9/26~10/11)

前夜祭

日時:10月9日(金) 18:00~21:00 会場:金沢21世紀美術館 シアター21 入場無料(出入り自由)

出演:アクション・ヒーロー、ニック・グリーン、スコッティ、アンディ・フィールド、イラ・ブランド、金沢舞踏館、ASUNA、kyo81、tanaka scat、sanchan、K.Onishi、金津史佳、四井雄大、Masumi Saito ほか
出店:住人の振る舞い出張カレー(限定30食)、one one otta(軽食、ドリンク)

アクション・ヒーロー「灰の中から」

日時:10月10日(土)、11日(日) 14:00~18:00(最終入場17:30まで) 会場:Kapo(金沢市野町)

ニック・グリーン「去りし者への唄(七つの橋)」

日時:10月10日(土)、11日(日) 10:30~18:30(各日13回公演、各回30分)
会場:山鬼文庫(金沢市桜町)

スコッティ「デルクギハウタレル」

作・演出:スコッティ パフォーマンス:Masumi Saito 映像:ホリー・レヴェル
日時:10月10日(土)、11日(日) 18:00~21:00(各日9回公演、各回15分)
会場:Badass Gallery(金沢市池田町)

関連企画

『非合理的な無口の静かな囁き』

日時:2015年10月10日(土)、11日(日) 13:30~18:30(各日5回公演、各回30分)

会場:香林坊窟(金沢市香林坊)

パフォーマンス:山田洋平 映像:久田歩美 ほか

主催:有志アーティスト 協力:金沢21世紀美術館 [(公財)金沢芸術創造財団]

MUSEUM ×
KNZ FRINGE
Meeting with
the City
~街と、人と、出会う~

その街に本当に触れる、ということ

徳永京子（演劇ジャーナリスト）

金沢ほどアクセシビリティが良い街は少ない。北陸新幹線がもたらした快適な交通手段のことを指しているのではない。洗練された文化施設と美しい景観の庭園が駅から近い場所にあり、着付け込みのレンタル和服で散策ができるし、和菓子づくりや金箔細工などの伝統工芸も体験できる。贅沢をしようと思えばそれに応える食材も料理人も充分にあり、ひとつ工夫こらされた手頃なお土産にも事欠かない。つまり「金沢に来た」という実感を得る手段が豊富で、しかも整備されているのだ。

けれどもアクセシビリティの良さは、諸刃の剣でもある。つるりと滑らかな表面に触れただけで満足して帰る人が多い、ということもあるからだ。

2017年11月3日から5日まで、金沢21世紀美術館を中心に開催された『カナザワ・フリンジ』は、そのジャンルへの突破口を開く小さいが重要な一步だった。

日本各地で次々と芸術祭、アート・フェスティバルが実施されている今日、前夜祭を入れても4日、プログラムは5つという『カナザワ・フリンジ』は、最小規模と言っていいだろう。だが内容は、参加者が金沢と向き合うことの一点に向けて設計された、深度、強度のある芸術祭だった。

大きな特徴は、5人のディレクターがそれぞれ一緒に作品をつくりたいアーティストを選び、ディレクター×アーティストのスタイルで作品を制作、発表すること。これは、この芸術祭の総合プロデューサーであり、自身もディレクターのひとりとして創作にも関わった黒田裕子（金沢21世紀美術館）の発案による。黒田以外のディレクターは金沢市内でアート系NPOなどに関わる人たちだが、選ばれたアーティストは、活動拠点を金沢に限定せず、国内外から招かれた。

『intoxicate #131』(2017年12月号)から再掲

紹介メディア一覧

テレビ番組

- 「となりのテレ金ちゃん」 2016.04.29
- 「レオスター」 北陸放送 2016.9.7
- 「ニュース・天気予報・交通情報」 NHK金沢放送局 2017.11.1

ラジオ番組

- 「PEOPLE&CITY I♡KANAZAWA」 エフエム石川
2016.6.12/2016.8.14/2017.10.8
- 「Ciao!」 エフエム石川 2017.10.25
- 「Ciao!」 エフエム石川 2017.11.1

新聞記事

- 「この瞬間 生きる 踊る 路上生活経験者らの『新人Hソケリッサ!』」 北陸中日新聞 2016.8.20
- 「"踊るホームレス"金沢へ 『ソケリッサ』10日まで21美などに」 北陸中日新聞 2016.9.6
- 「治部煮など郷土料理アレンジ 21美で弁当試食会」 北国新聞 2017.9.8
- 「金沢の食文化 考える弁当100個」 朝日新聞 2017.9.14
- 「がん語り合うアート」 朝日新聞 2017.10.17
- 「金沢市広報」 北國新聞 2017.10.17
- 「異文化加え『奇妙弁当』」 北國新聞 2017.10.27
- 「がんを語るアート」 北陸中日新聞 2017.10.28
- 「金沢21世紀美術館の『カナザワ・フリンジ』11月3日～5日」 北陸中日新聞 2017.10.28
- 「3日からカナザワ・フリンジ 中心部で体験型アート」 北国新聞 2017.11.1
- 「21美『カナザワ・フリンジ』開幕 美術の枠を超え競う」 北陸中日新聞 2017.11.4
- 「驚きと発見 体験型アート 金沢でフリンジ開幕」 北國新聞 2017.11.4
- 「ダンス・料理…街でアートに」 朝日新聞 2017.11.4
- 「『体を動かす』原点演出 カナザワ・フリンジ『新人Hソケリッサ!』／なかむらくるみさん」 北陸中日新聞 2017.11.11
- 「カナザワ・フリンジ 創造の輪が起こす変化」 朝日新聞(夕刊・全国版) 2017.11.30
- 「高校生×バブル 路上生活経験者の存在感」 朝日新聞 2017.12.25

雑誌記事

- 「金沢21世紀美術館〈カナザワ・フリンジ〉 その街に本当に触れる、ということ」 intoxicate #131 2017.12.20
- 「街や人々との出会いで生まれる作品 カナザワ・フリンジ2017」 Rural 2017 AUTUMN vol.07 2017.9.30

ウェブ媒体

- 「国内外の作家が金沢で滞在制作『カナザワ・フリンジ』で5つの新作発表」 CINRA.NET 2017.10.23
- 「カナザワ・フリンジ 2017」 myLiFE+ 2017.10.28
- 「カナザワ・フリンジ 2017 KANAZAWA FRINGE」 金沢日和 スポット情報 2017.10.30
- 「〈カナザワ・フリンジ 2017〉金沢21世紀美術館のアーティスト・イン・レジデンス・プログラムをピックアップ!!」 Mikiki 2017.11.1
- 「(石川)体験型アート「カナザワ・フリンジ」始まる」 朝日新聞デジタル 2017.11.4
- 「『体を動かす』原点演出 カナザワ・フリンジ『新人Hソケリッサ!』／なかむらくるみさん」 中日新聞(CHUNICHI Web) 2017.11.27
- 「一人ひとりにアートを届ける『カナザワ・フリンジ2017』の試み」 CINRA.NET 2017.11.27
- 「金沢21世紀美術館で開催されたアーティスト・イン・レジデンス・プログラム〈カナザワ・フリンジ 2017〉をレポート」 Mikiki 2017.12.19
- 「金沢市観光協会公式サイト かなざわへ出かけよう。金沢旅物語 イベントカレンダー」
- 「カナザワ・フリンジ 2017」 Spotclip

On Voyage with KANAZAWA FRINGE

Yuko Kuroda

(Program Director / Coordinator of Performing Arts and Events, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa)

In Kanazawa, a historical and cultural city, the viewpoints of directors, and the artists who serve as a catalyst converge. When these three raw materials are blended together in a mixer, what will be the result? Depending on the cooking method, some things delicious and others unpalatable. Although the strength and freshness of the ingredients themselves are indispensable, so is sharp creativeness that acts as seasoning. It also requires intuition and instantaneous force to seize the ideal moment of completion. Conflicting ideas, hidden gems, and odd values are condensed into the resulting product, leading to sweet sensations that are also sometimes poisonous. Once taken into the body, it steadily ferments and penetrates.

With artists leading the act, productions and experiments are undertaken that bring people's activities in Kanazawa into sharp relief. Actions are undertaken simply by believing in changes and burgeoning of new growth without worrying about form or genre. In such an experiment, KANAZAWA FRINGE takes on the role of a mixer.

It began in September of 2014. I traveled around Kanazawa together with Andy Field, Artist and Co-Director of Forest Fringe, an artist-led organization in the UK. Forest Fringe is one part of the Edinburgh Festival that has been held in the UK every summer since 1947 and which has provided an independent space for creating risky and adventurous works since 2007. The expression of the artists exhibiting there is contemporary, raw and radical, powerful and

fearless.

In 2015, Andy and I selected three groups of artists active at Forest Fringe and invited them to Kanazawa to explore a space for creative works in the city area. Furthermore, independent art directors based in Kanazawa were taken on to support these artists as partners. In the process leading up to presenting new works, the artists were able to experience the charms and possibilities hidden within Kanazawa's city and its people and catch a glimpse of the source of creativity and change. In the following year of 2016 and after two years of preparation, KANAZAWA FRINGE was ready to be realized as partners took on the role of directors and planning started from selecting original themes and finding artists to participate.

What are the aspirations and what drives people to live? In a journey that continues to question pleasure, pain, our own existence, and our society, expressive activities bear a social role as a place to search for these answers. The five programs recorded here may be specific and local events. However, in the creative process, or the places where works are exhibited, both the creators and visitors with shared intense experience will contribute to move this idea forward with renewed momentum. The concept of the "fringe" subsumes diversity. If discomfort is felt at everyday affairs becoming incorporated and homogenized to the intentions of the majority, courage and a basis for judgment need to be found within ourselves to shift our gaze onto such subjects without fear. This

is "fringe in motion." The first step forward becomes the thought and the action is inherited as memory to form a rich soil. We are fortunate to have the resource and environment in which to realize KANAZAWA FRINGE.

On behalf of the directors of KANAZAWA FRINGE 2016-2017, we would like to express gratitude to the artists, locals, visitors, contributors, staff, and everyone else who we have met through this project.

TEI-EN Bento Project

ABOUT THE PROGRAM

Join chef Shunsuke Inada in the production and sale of original "Bento" under the fictional context of "a New Yorker, who falls in love with Kanazawa cuisine, opens the sincere yet misconstrued "TEI-EN" restaurant that offers new types of local cuisine from Kanazawa."

From the chef's peculiar viewpoint, the Kanazawa cuisine offered by TEI-EN comprises a diverse range of à-la-carte dishes, some that are frequently introduced as local cuisine to others that, while charming, are on the verge of extinction. Flavors undulate from fusions of international cuisine to unchanged regional tastes. Furthermore, a survey on eating order is enclosed with each bento that asks participants the order in which they ate their food. The aim is to clarify how each person thinks or doesn't think about how they approach food consumption.

This project creates an opportunity to think about eating through a new dining experience that intentionally incorporates large differences in the types of food on offer.

ARTIST

Shunsuke Inada (Chef, Restaurant Producer / Nagoya)

Developing and producing restaurant business conditions, making original recipes for various genres of dish such as Japanese, French and ethnic.

ARTIST COMMENT

The "KANAZAWA EXTREME BENTO" is a somewhat curious take on Kanazawa cuisine. If approached and eaten like a regular "Makunouchi bento", which generally consists of rice along with fish, meat, pickles, eggs, vegetables, and an umeboshi, diners may find that much of the food has an unusual taste. However,

this bento does not actually contain any food solely for the purpose attracting attention. While generally unfamiliar to Japanese people, this bento is an experimental mixture of common foods eaten everyday in some parts of the world, old dishes that most people have forgotten about, and contemporary makunouchi bento that few people are familiar with. Diners will be able to enjoy the excitement of encountering new tastes and strange sensations that cannot be experienced with standard bentos.

The act of eating always creates profoundly rich stories. The more these stories are taken in earnest, the further the enjoyment of these stories is amplified indefinitely. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

Many people responded to our bento survey and we learned that even when eating the same cuisine, people held a different perspective regarding food until now. In particular, we were thrilled to received feedback such as "I had no idea food could be enjoyed with such an approach."

After the project finished, I actually ended up becoming involved with a restaurant themed on local cuisine in Gifu Prefecture. It was then I realized that my approach at this restaurant was merely an extension of this project. As many a true word is spoken in jest, it felt like reality and fantasy had approached each other very quickly. To put it another way, I have began to think that food of total fantasy that never intersects with reality is something like this.

DIRECTOR

Yoko Ueda (Kanazawa Artgummi)

Director at NPO Kanazawa Artgummi: Planning & Coordinating Exhibitions, Graphic & Web Design, Tour Guide, Supporting Artists.

Placing great importance on eating.

DIRECTOR COMMENT

Think about eating like we think about art. This is the motivation behind the TEI-EN Bento Project. There are various criteria for evaluating delicious and unpleasant tastes. Even though local cuisine shaped by climate and history is often presented in simplistic and limited terms, much like the development of tourism in Kanazawa, I don't think local cuisine can be explained so easily. The goal of this event isn't to aim for the "deliciousness" or "comprehensibility" that local cuisine is generally known for. Instead we hope that the one-off meal of the "Peculiar Kanazawa Bento", including the local cuisine that tends to be forgotten these days, the tastes of one's own city unexpectedly leading to other food cultures, and for myself as a Japanese person, the criteria for evaluating peculiarity, deliciousness, and unpleasantness, can inspire the imagination about the many different food cultures around the world. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

I feel that KANAZAWA FRINGE is still burning on, even if on a low flame. Somehow I believe that the TEI-EN team will again work together on another production for enjoying food in which the charm of food (other than the well-known kaisendon of Omicho Market) can be rediscovered.

CREDIT&DATA

KANAZAWA EXTREME BENTO

Pick-up venue and time:
2017/10/08 (Sun), 2017/10/14 (Sat), 2017/11/14 (Sat) 11:00-13:00
21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
Limited 100 boxes, 1,500yen (Reservation required)

Viewing of the BENTO preparation

2017/11/3 (Fri) 10:00-12:00
Venue: Kitchen room of Omicho fish market
Fee: 500yen
For 15 audience members

Talk Event "Makunouchi Theater"

2017/11/4 (Sat) 13:00-15:30 Free
Venue: Lecture Hall of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
Speakers: Shunsuke Inada
Etsuko Aoki
3 Audience members

For 80 audience members

TEI-EN Fun meeting

2017/11/5 (Sun) 12:00-13:30
Venue: Tea room "Shoutou-an" of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
Fee: 500yen
For 15 audience member

In cooperation with: Yudai Shii

Movie: Ichiro Mae
Support during event period: Keisuke Nishikawa
Cooperating partners: Enso Food Service Inc.
Aoki Cooking School

Fun with Cancer Patients: Kanazawa

ABOUT THE PROGRAM

Originating from Brian Lobel's own experience with cancer, Fun with Cancer Patients is a collaborative creative project involving cancer patients that began in 2009.

After coming to Japan for a preliminary survey in 2016, Brian confronted the question of "why is it difficult to talk about cancer even though I want to talk about it more?" Together with a number of professionals who provide support for local patients with cancer experience and bereaved family members, this project aims to create a safe and comfortable space where people can have conversations about cancer.

ARTIST

Brian Lobel
 (Performer, director, playwright / US, UK)
 Brian Lobel is a performer, teacher and curator who creates work about bodies and how they are watched, policed, prodded and loved by others. He shows work internationally in a range of contexts, from medical schools to museums, marketplaces to forests, blending provocative humour with insightful reflection.

ARTIST COMMENT

For me, art is defined as anything which makes a person stop what they are doing, reflect on an object or a situation, and then re-enter the world with a new perspective. Fun wth Cancer Patients provides audiences with a rare and special moment to take time out of time to reflect on illness, life and living. And like the most rare and special conversations that we have, they often leave us feeling more open to the world and its possibilities. And that, that is what we hope to provide, and why we call this "art".

(Excerpts from Artist Statement, Nov. 2017)

Fun with Cancer Patients was created cautiously,

with lots of consultation, questioning and trepidation. Would audiences get it? Would patients and their families and communities feel supported? Could people truly be themselves? How best to create 'safe spaces' or 'safer spaces'? All the questions, however, resulted in a show which was beautiful and open, providing a frame for so many different participants and audiences. This openness is a space that I treasure, and one which informs all of my work going forward. I'm not interested in answering questions, I'm interested in facilitating more questions, for both myself and others. I want this work to grow and the communities of people affected by the work to become more verbal, more powerful, more confident. I know that, as a maker and as an artist, I have grown so much through questions and co-creating work with others.

DIRECTOR

Yuko Kuroda
 (Program Director / Coordinator 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa)

In 2014 launched an artist in residency program which eventually became "Kanazawa Fringe", where artists are invited to explore the City to conceive and present their new works in relation to our society, in unconventional ways, challenging the physical and psychological boundaries that may exist between genres and established art form.
<http://www.kanazawa21.jp>

DIRECTOR COMMENT

While based on the specific theme of cancer, this conversational, interactive, and participatory work is open to everyone gifted with a finite life. To talk about cancer is to talk about life and death, society, and vision of life. Conversation is the creative means most familiar and accessible to everyone. What are the important subjects in our

daily lives? When we have problems, how do we find our way to resolution? Fulfilling conversation may lead to some sort of change. Are there important topics that you've always avoided? (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

In the final chapter of Fun with Cancer Patients, we asked participants questions like "When you become seriously ill, to whom, where, and how will you initially convey this fact?" and "Other than cancer, what sort of social issues do you think we should be thinking and talking about?". It is at this point that visitors who simply came to enjoy a conversation in a different spacial dimension are instantly pulled back to their own reality. Instead of providing people with solutions, they must be able to reach them on their own. And if people can then act upon the solutions they find, I think that is the best outcome of this project. As visitors inexperienced in this topic uneasily mixed with the more knowledgeable Kanazawa project members, we witnessed the gradual appearance of bright and cheerful smiles on the faces of all people involved. This I think was the manifestation of an energy that everyone discovered within themselves.

Although this event has finished, it also feels like a new beginning.

CREDIT&DATA

Performance: 2017/11/3 (Fri) -2017/11/5 (Sun)
 11:00-15:00

Exhibition: 2017/11/3 (Fri) -2017/11/5 (Sun)
 10:00-17:00

Venue: Theater 21, 21st Cnetury Museum of Contemporary Art, Kanazawa

[Fun with Cancer Patients Kanazawa members]
 Atsuya Tsukamoto, Chika Bando, Hideko Hashimoto, Hiromi Nomura, Hiromi Tanimoto, Hiroyuki Susaki, Ikiko Nakamura, Ikue Kawasaki, Junichiro Takagi, Keiko Tsuchida, Kiyotoshi

Takayama, Kotomi Sato, Kyoko Takeuchi, Maki Kamai, Masaki Tsuda, Michiko Taya, Miho Oda, Mikiko Fukumura, Mikiko Nogami, Mitsuko Hisada, Mutsumi Watanabe, Noriko Hirayama, Noritaka Hashi, Reiko Ikeda, Ryuji Yamamoto, Setsue Yamaguchi, Shigeko Takahashi, Shigeyoshi Sakamoto, Shoichi Hashimoto, Shoko Anezaki, Shunsuke Kanno, Yoko Hikizu, Yoshiro Yamamoto, Yuki Saito, Yuri Kitagawa (alphabetical) and all other members

Staff:

Miyo Kimura (Nurse of Cancer Support House of Ishikawa Prefecture)
 Mamoru Iriuchi (Designer)
 Christa Holka (Photographer)
 Jo Allan (Production Manager)
 Mikiko Fukumura (Catering)

Yuna Yoshida (Production Assistant)
 Haruka Okuda (Production Assistant)
 Akane Yorita, Asako Tai, Hiroko Tsukamoto, Megumi Matuno, Misato Kaseda, Naoko Tsutsui, Takafumi Komori (Setup Assistant)
 Maki Hashizume (Interpreter)

Technical staff:

Yoshihiro Gouda (Technical Director)
 Kanazawa Butai Co., Ltd. (Stage/ Lighting)
 Hiroshi Shiroshita (Sound)
 Profocus Co., Ltd. (Video)
 Hokusui Co., Ltd. (Set up)

Cooperating partner: Cancer Support House of Ishikawa Prefecture

Supplies: MUGI, SKLO (Furniture), Fukunao Co., Ltd (Takoyaki), Kasei Foods Co., Ltd. (Sweets)

Walk with Me

ABOUT THE PROGRAM

"Walk with Me" is a participatory work produced by Wei Hsinyen during her stay in Kanazawa. The work is an experiment in discovering the scenic form of Kanazawa in the hearts of its residents. The artist walks one-on-one with local residents down paths they take in their daily lives and paths that evoke personal memories while the residents share their own stories about the paths and scenery. The artist produces poems or letters based on the time spent with residents and these are sent to each participant. These appear in the exhibition room as "a new map of one's time in Kanazawa" that ties these scenes together.

a walk/ a path/ a scenery/ a story/ a poem/ a letter/ a note

a work/ a vision/ a new map of one's time in Kanazawa

ARTIST

Wei Hsinyen (Artist / Taiwan)
Born in United States in 1986.
Lives and works in Taiwan.
She creates photographs, movies and performance works on the theme of sociality and stories which people has. While staying in Kanazawa, she will produce work focusing on the intimate relationship between people and the city.

ARTIST COMMENT

I'm extremely fortunate to be in Kanazawa for a whole month, to be more clearly, I'm extremely fortunate to have walked with these twenty three people. Not many people could have the chance to share people's generosity, personal memory and feel the intimacy all at once in such intensive cases. There was a moment I felt anxious, I was afraid I could not handle such delicate gifts /

emotions well. I could really feel people's hearts. I have nothing to return the sincerity I have received.

Hopefully the flowers could ease away some of my guilt. Flower may decay but friendship and moments remain. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

I received so much through this wonderful adventure in KANAZAWA FRINGE that I truly felt time was needed to organize my emotions and thoughts afterwards. People were so generous and open to me, they shared their personal stories to me as I was one of their old friends. The work was genuinely about my encounters with each participant. I will sum up my feelings through what I shared with one individual that was in my tour: 'I don't know what is art anymore as I execute my project, but I feel really happy and fun doing it.' She responded to me: 'I feel the same.'

DIRECTOR

Masahiro Saito (Kapo Director)
Artist / Art coordinator
Born in Yamagata Prefecture, Japan in 1981.
Works and lives in Ishikawa Prefecture, Japan.
M.F.A. Tsukuba University.
2008- present Director of Kapo (art space, Kanazawa)
2009-2017 Coordinator&curator of CAAK & Kapo Creator in Residence
He worked for "Kanazawa Art Platform 2008", "Triennale of KOGEI in Kanazawa", "Museum × KNZ Fringe", and other exhibitions and projects.

DIRECTOR COMMENT

For those of us who live here, our minds are imprinted with images of Kanazawa city that do not portray a tourist destination.

Twenty three residents of Kanazawa participated in "Walk with Me". Each resident took a one-on-one

walk with artist Wei Hsinyen while sharing memories and thoughts about the paths and scenery. Together as they walked, Wei would listen to their voice, take in their feelings through their expressions, and sympathize with them. The extensive amount of information and warmth exchanged between the two only emerged during the intimate time and along the distance they walked together. There are only so many stories of individuals relating to scenery as there are people who tell them, and that number is vast. I hope that the exhibition and guided tour allow visitors to imagine this wealth of information and warmth and to contemplate its meaning. Lastly, I sincerely thank everyone who participated in this project. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

What kind of world emerges when the artist is the medium and separate sceneries are connected? For Wei, "Walk with Me" was her first attempt at such a project. She intends to continue this project, which started in Kanazawa, in many other locations as part of her life work. KANAZAWA FRINGE enabled her to take the first step on this journey. As far as changes and outcomes are concerned, I believe they are not something that appears immediately, but they will be bought to life before long through Wei's continuing work and the renewed everyday lives of participants.

CREDIT&DATA

Exhibition

2017/11/3(Fri)-2017/11/5(Sun) 10:00-17:00
Venue: Meeting Room 1, 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

Guide Tour

2017/11/3(Fri)-2017/11/5(Sun) 10:00-, 14:00-, 16:00-

Participants of "Walk with Me" (October 2017)
Akane Nakamori, Aoi Watarai, Kaori Komai, Kayoko Ikeda, Kazuo Takeno, Masakazu Maeno, Megumi Matsuno, Mieko Sawai, Misato Kaseta, Miyuki Okuda, Namiko Nishikawa, Natsu Sasaki, Reiko Jimbo, Shingo Oyama, Tomoko Hayashi, Wataru Shimbo, Yohei Yamada, Yukihiro Nishikawa, Yukiko Fujihashi, Yuko Iwasaki, Yulia Shinoda, Yuta Konishi, Natsumi Harashima, and an anonymous (Alphabetical Order)

Installation support: Lin Mingyan (Haiton Art Center, Taiwan)

Assistant: Ayami Miyakoshi, Szu Yun Lin

Cooperating partner: Bamboo Curtain Studio, Kao Sentou, Kanako Kitaguchi, Kei Sakamoto, Nanako Takahashi

The House of Asanogawa

ABOUT THE PROGRAM

The neighborhood of Tokiwabashi (Tokiwa-bridge) on the Asano-River is a gateway between this world and the next world. It is the area where people from the next world occupy 'The House of Asanogawa (Asano-River)'. Together we can visit this house to meet them.

Experience a repose of souls in dance in 'The House of Asanogawa'.

The dance is a ritual of revival to prepare for a new divinity beyond our daily lives. Our souls will be calm and will turn into pure water drops in the Asano-River, which before long, find their ways to the vast expanse of the sea.

ARTIST

Sokerissa! (Performance / Tokyo)

"Sokerissa!" a word freelance dancer, choreographer Yuki Aoki coined himself that sounds similar to the expression "Soreike" (meaning "Go for it!"). In 2007, he launched a dance troupe "Sokerissa," in the first show. Since then, the group has given numerous stage and street performances, as well as appearing in symposiums and art events across the country. Aoki believes that everybody has their own history of their lives on their bodies, and celebrate all of us as "being simply human."

ARTIST COMMENT

Sokerissa! is a dance group consisting of people who have experienced living on the street. While we usually perform our dances on the street, this time each member of our group has conceived a repose of souls in dance while spending time as strangers from the next world at "The House of Asanogawa". We hope that the time spent with us serves as a ritual in which participants are able to contact their inner nature, witness that nature take form and ride the flow of the Asano river,

and finally return to the sea, the starting point of mankind. We are only one-time guests in this universe. Maybe we are all strangers from the next world. All members of our group hope that the our performance on the Asano river will be a lasting, if only small, memory for everyone involved. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

The long stay in Kanazawa provided us with greater interest in seeing what kinds of scenes would transpire when our group known as Sokerissa, which began in Tokyo, and the dances we perform are placed in other locales and environments. We'd like to develop our performances so that even in regional areas, it is people from other worlds that can provide the opportunity for new discoveries and conversations to emerge.

DIRECTOR

Akane Nakamori (Suisei-Art)

Artist, Suisei-Art director.

1998-2012 Introduced artists in Kanazawa at Gallery-Bar Suiseicloud

2013- Exhibition planner in Sanki Bunko, Hitoshi Mori private library

2017- Opened Studio Suisei-Art in Kanazawa

DIRECTOR COMMENT

"The House of Asanogawa" revolves around the themes of pilgrimage and sublimation and is based on a folk belief that continues to this day. Kanazawa is current being exposed to changes in a new era. Many literary figures and artists have left Kanazawa in search of new stimulation and encounters. We now have the ability to send waves from Kanazawa out to the world. The air of this land that quietly stood still until recently is vibrating with the values of strangers from the next world. KANAZAWA FRINGE was conceived at the time of this major paradigm shift. The topics

covered in this project are meaningful to me as someone who was born and raised in Kanazawa.

In one of his novels, Kyōka Izumi wrote with elegant simplicity about darkness around the Asano river and the strange creatures he introduced. Yukio Mishima also produced a story based on Kanazawa. What kind of story will be told this time in "The House of Asanogawa"? (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

In the end, I think many people were captivated by this special performance. There was a wealth in the variation of age and occupation of participants and we received feedback beyond our expectations that included "mysterious," "god-like presence," "unbelievable," and "cleansing." Everyone possesses some sort of divinity and the ability to become a creator. It was through Sokerissa!'s performance that we were able to confirm that the act of living is generally equates to self expression.

CREDIT&DATA

2017/11/3(Fri), 11/4(Sat) 11:00-, 12:00-, 14:00-, 15:00-, 16:00-

Venue: The House of Asanogawa (Zaimoku-cho, Kanazawa)

Performers: Sokerissa! (Yuuki Aoki, Masato Yokouchi, Matsuyoshi Koiso, Haruo Ito, Shuichiro Hirakawa, Yoshiharu Watanabe, Tokuchika Nishi)

Musician: Masatoshi Utajima

Duration : Approx 30 min

Fee: Pay what you can

For 5 audience at a time(Upon reservation)

Video archivist: Ayumi Hisada

Sound: Norihiro Mori (Modrilla Studio)

Advisor on venue construction: Ichiro Ogura

Support during event period: Yasuko Tamura, Tomoko Kato, Soya Ozato

Improvised performance

2017/11/05(Sun) 11:00-, 13:00-

Venue: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

Performers: Sokerissa!

Musician: Masaki Ishikawa

Sokerissa! Talk

2017/11/5(Sun) 14:00-15:30

Venue: Lecture Hall of 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
For 80 audience members

Assistant: Miho Yamamoto

Cooperating partners: The House of Asanogawa, Miyoko Masuda, Sumi Kato, Hitoshi Mori (Sanki-Bunko), Murataya-ryokan, Tomoyuki Minagawa (Non Profit Organization Friendy), Yasuyuki Kosaka, The Big Issue Japan

Program 5

Eyes of the Artists

ABOUT THE PROGRAM

The artist's eyes discover new aspects and provide a gentler glimpse of viewpoints and values that have become subconsciously stagnant.

In this light, Kurumi Nakamura examines the boundary between the self and others through the idea of the "body", which is the source of our emotions and actions, with the video installation and performance of "Their Characteristics and Why". Tomoya Murazumi confronts the fundamental question of "why do people create things?" with the exhibition of "Under the bed".

ARTIST

Kurumi Nakamura(Dancer / Kanazawa)

Born in Kanazawa. She got a diploma from RAMBERT SCHOOL of Ballet and Contemporary Dance.

She is a qualified home caregiver, yoga instructor (Yoga Alliance), maternity and moon cycle Yoga instructor. She is offering Yoga and dance class for sharing the time for feeling body, breath, and mental with respect their difference. It is offered regardless of age, gender, or disability.

ARTIST COMMENT

I've had the following experiences: "what should I do if they come closer?", "I'm a bit scared", "that looks tough". These are the feelings we may experience when observing someone talking to themselves loudly at the bus stop or on the train, or someone leaning over awkwardly as they walk. Due to the nature of my work and because I'm fortunate enough to live in a time that provides the opportunity to meet a wide range of people everyday, the fear, anxiety, and confusion I felt in the past has transformed into feelings of beauty, and I am now soothed by the frank expressions and actions of people's natural posture. By looking at others without focusing on physical features but

learning the reasons for such features, perhaps we can change how we view others and how we think of ourselves. As someone who has for many years traveled a path of self-expression through the use of my body, this year's project has provided a precious opportunity for me to confront and further develop my thinking on this subject. (Excerpts from Production note, Nov. 2017)

Many of the impressions we received were feelings of warmth, being at ease, happiness, peacefulness, and bringing smiles to people's faces.

We're eager to produce a similar work again in the future with performers in their usual form and onlookers able to thoroughly take in the performance. We'd like to create works where everyone is able to relax and enjoy these moments with honest feelings. We hope to continue valuing the relationships with everyone we encounter on a daily basis without having to segregate people with words like "disabled person" and "healthy person".

ARTIST

Tomoya Murazumi(Artist / Kanazawa)

Born in Hokkaido. Residing in Ishikawa, Tsubata. Oil painter, sculptor, and doing assemblage. His work is focusing wondering existence or phenomenon which is difficult to explain by rationality.

He is also planning exhibition, scenography, and doing workshop in welfare facilities for handicapped.

In 2013, he start the gallery "THE ROOM BELOW" for artist who is not under the art context. By doing this gallery, he tries to redefine the meaning of the art.

ARTIST COMMENT

I have held art lessons at many welfare institutions.

During this time I had the opportunity to catch a glimpse of an interesting object I hadn't noticed before in the room of an art class participant. This object, which he most likely created in his room, was carefully stowed under the bed as if it were a secret to be hidden from the eyes of others. In many cases, this kind of art begins with the intent of sincerely confronting one's own life and results in a sort of crystallization that emerges from the harmony between living and creating. (Excerpts from "Under the bed" - surreptitious creativity, Tomoya Murazumi)

We received a good amount of both positive and negative feedback. The project did not end with our one-sided exhibition since we held a discussion involving many people that was both meaningful and stimulating.

In addition to the important value that each creator places on their work, such value may also exhibit a universality shared with others. This created an atmosphere in which everyone could question and rethink their own common knowledge to date.

DIRECTOR

Yohei Yamada(YAMADA KIKAKU)

Artist, planning and production creator, theater director, choreographer.

He studied oil painting, sculpture, modern dance and classical ballet at the University of Tsukuba. From 2010 he moved to Berlin, worked with international choreographers including Colette Sadler, Tristan Sharps, Darren Johnston, Tino Sehgal, Alessio Silvestrin. From 2013, he moved to Ishikawa.

DIRECTOR COMMENT

Something that can be said for both Tomoya and Kurumi's work is that instead of having disabled people perform something special, they focus on showing people their everyday activities. And opposed to preparing and exhibiting diverse individuality, the work of these two artists, which presents these people as they are, is in itself an acknowledgment of diversity and one that raises

questions about values that have become subconsciously stagnant. As a result, their work compels us to think about what comprises the boundary line that separates disabled people and healthy people and demonstrates the inaccuracy in our belief that such a distinct line even exists.

CREDIT&DATA

"Their Characteristics and Why" Performance
2017/11/3(Fri), 2017/11/4(Sat) 13:00-, 14:00-,
2017/11/5(Sun) 13:00-

Venue: Kapo(Nomachi, Kanazawa)
Performers: Kurumi Nakamura, Akemi Kubo, Kosei Ohie, Yuuka Tsubota, Shion Honda, Takao Aoyanagi, Rintaro Uo
Duration: 30 min
Fee: 300yen

For 10 audience at a time(Upon reservation)

"Their Characteristics and Why" Video installation
2017/11/3(Fri)-2017/11/5(Sun) 10:00-17:00
Venue: Kapo(Nomachi, Kanazawa)

"Under the bed" Exhibition
2017/11/3(Fri)-11/5(Sun) 10:00-17:00
Venue: Kapo(Nomachi, Kanazawa)
Participants: Miyuki Takamiya, Kunio Suzumi, Eizo Takenaka, Naoto Nakata, Yoshitaka Taniguchi, Tsuyoshi Hayashi, Akihiro Fujiwara, Junji Fujiwara, Akira Funahashi, Shinji Yamashita, Minoru Yonezawa
Cooperating partners of "Under the bed": Social welfare Juridical Person Matsubara-Aiikukai, Aiiku-gakuen, Fjinoki-ryo, Kinjo-gakuen, Kanazawa teotunagu Oyanokai Suzumi-dai Nijinoie, Kanazawa-shi MiseiKyo-kai Mitaninosato Tokiwaen, BUSSI-EN Able veranda Be

Support during event period: Hisako Hirata, Sora Hirata

謝辞

本事業開催および本記録集作成にあたり、各プログラムのアーティストやディレクター、様々な場面で多大なご協力を賜りました個人や団体の皆さんに深く感謝の意を表します。また、会場に足を運び、プログラムに参加いただいた皆さんにもこの場をお借りしてお礼申しあげます。

金沢21世紀美術館

Acknowledgements

We would like to express our sincere gratitude to the organizations and individuals as well as the artists and the directors for each program, for their generous contributions to the realizations of this project and this document.

We would also like to express our sincere appreciation to audience members who made their contribution to play an integral part of each program.

21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa

金沢21世紀美術館維持会員

株式会社 中島商店	株式会社 浅田屋	一般社団法人 MuU
株式会社 橋本確文堂	北菱電興 株式会社	一般社団法人 石川県織維協会
ヨシダ印刷 株式会社	株式会社 四緑園	株式会社 大和
株式会社 パークウェーブ	公益財団法人 金沢勤労者福祉サービスセンター	北陸東和冷暖房 株式会社
株式会社 北都組	株式会社 橋本清文堂	アムズ 株式会社
金沢市一般廃棄物事業協同組合	カナカン 株式会社	株式会社 あまつぼ
金沢商工会議所	株式会社 かゆう堂	ヨシダ道路企業 株式会社
SANAA事務所	株式会社 バルデザイングループ	株式会社 金太
株式会社 竹中工務店 北陸営業所	石川県ビルメンテナンス協同組合	イワタニ北陸 株式会社
米沢電気工事 株式会社	横浜エレベータ 株式会社	未広フーズ 株式会社
ナカダ 株式会社	株式会社 ほくつう	北陸スカイテック 株式会社
金沢市農業協同組合	株式会社 グッドフェローズ	辻商事 株式会社
株式会社 福光屋	日本海警備保障 株式会社	アキュテック 株式会社
一般社団法人 石川県鉄工機電協会	株式会社 山越	三谷産業 株式会社
大村印刷 株式会社	株式会社 浦建築研究所	スーパーファクトリー
石川県勤労者文化協会	田中昭文堂印刷 株式会社	イカリ消毒 株式会社
前田印刷 株式会社	株式会社 金沢商業活性化センター	森平舞台機構 株式会社
株式会社 うつのみや	株式会社 加賀麁不室屋	株式会社 クスリのアオキ
ヨシダ宣伝 株式会社	金沢中央農業協同組合	アズビル 株式会社
公益社団法人 金沢市医師会	べにや無何有	北陸電話工事 株式会社
金沢信用金庫	日本ケンブリッジフィルター 株式会社	株式会社 五井建築研究所
株式会社 総合園芸	めいてつ・エムザ	金沢セメント商事 株式会社
西日本電信電話株式会社 金沢支店	日機装 株式会社	株式会社 エイブルコンピュータ
株式会社 ヤギコーポレーション	横河電機株式会社 金沢事業所	ホクモウ 株式会社
株式会社 北國銀行	協同組合 日本ビジネスロードセンター	医療法人社団 映寿会
一般社団法人 金沢建設業協会	有限会社 芙蓉クリーンサービス	鮭 みつ川
ニッコー 株式会社	株式会社 インプレス 美術事業部	株式会社 山田写真製版所
連合石川かなざわ地域協議会	株式会社 甘納豆 かわむら	株式会社 ユニークポジション
株式会社 金沢環境サービス公社	ArtShop 月映	株式会社 ロフト金沢ロフト
医療法人社団 竹田内科クリニック	株式会社 アドバンス社	株式会社 鍛冶商店
株式会社 日本海コンサルタント	金沢ターミナル開発 株式会社	株式会社 東急ハンズ金沢店
株式会社 アイ・オー・データ機器	株式会社 グランゼーラ	株式会社 木村硝子店
石川県中小企業団体中央会	まつだ小児科クリニック	坪田 聰
医療法人社団 健真会 耳鼻咽喉科安田医院	公益財団法人 高岡市勤労者福祉サービスセンター	51%五割一分
株式会社 メープルハウス	アルスコンサルタンツ 株式会社	(2018年2月28日現在)
能登印刷 株式会社	株式会社 計画情報研究所	
株式会社 金沢舞台	しま矯正歯科	
株式会社 マイブックサービス	株式会社 計画情報研究所	
北陸名鉄開発 株式会社	株式会社 ビー・エム北陸	
高桑美術印刷 株式会社	協同組合 金沢問屋センター	

AIR21:カナザワ・フリンジ2016

2016年6月11日(土)-2016年9月11日(日)

主催:金沢21世紀美術館[(公財)金沢芸術創造財団]

NPO法人金沢アートグミ、Kapo、Suisei-Art、山田企画

ディレクター:上田陽子、黒田裕子、齋藤雅宏、中森あかね、山田洋平

事務局(金沢21世紀美術館):黒田裕子、佐藤由貴、高橋洋介、吉田裕梨

ドキュメンテーション:喜多舞衣(オノマトペ)

広報(金沢21世紀美術館):川守慶之、坂元圭

宣伝美術:北口加奈子

AIR21 : KANAZAWA FRINGE 2016

Saturday, June 11, 2016 - Sunday, September 11, 2016

Organized by: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa(Kanazawa Art Promotion and Development Foundation)
Kanazawa Artgummi, Kapo, Suisei-Art, YAMADA KIKAKU

Director: Yoko Ueda, Yuko Kuroda, Masahiro Saito, Akane Nakamori, Yohei Yamada

Secretariat (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa): Yuko Kuroda, Yuki Sato, Yosuke Takahashi, Yuna Yoshida

Documentation: Mai Kita (Onomatope)

Public Relations (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa): Yoshiyuki Kawamori, Kei Sakamoto

Advertising Design: Kanako Kitaguchi

カナザワ・フリンジ2017

2017年11月2日(木)前夜祭

2017年11月3日(金・祝)-2017年11月5日(日)

金沢21世紀美術館、あさのがわのいえ、近江町市場、Kapo、ほか金沢市街

主催:金沢21世紀美術館[(公財)金沢芸術創造財団]

企画協力:上田陽子(認定NPO法人金沢アートグミ)、齋藤雅宏(Kapo)、
中森あかね(Suisei-Art)、山田洋平(山田企画)



助成: 平成29年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業、

『Fun with Cancer Patients がん患者とがんトーク:金沢編』は宝くじの助成を受けて実施しています。

後援:北國新聞社、北陸放送、石川テレビ放送、テレビ金沢、エフエム石川

ディレクター:上田陽子、黒田裕子、齋藤雅宏、中森あかね、山田洋平

事務局(金沢21世紀美術館):黒田裕子、吉田裕梨、佐藤由貴、吉備久美子

編集・文:喜多舞衣(オノマトペ)

広報(金沢21世紀美術館):川守慶之、坂元圭

デザイン(Hotchkiss):久松陽一、尾崎友則

コピーライター:宮保真(ワザナカ)

トレーラー:山田遼志

映像編集:前伊知郎

記録撮影:池田ひらく

KANAZAWA FRINGE 2017

Thursday, November 2, 2017/ Opening Event

Friday, November 3 - Sunday, November 5, 2017

Venues: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa, The House of Asanogawa, Omicho fish market, Kapo, and others

Organized by: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa(Kanazawa Art Promotion and Development Foundation)

In Cooperation with: Yoko Ueda(Kanazawa Artgummi), Masahiro Saito(Kapo),
Akane Nakamori(Suisei-Art), Yohei Yamada(YAMADA KIKAKU)

Supported by: The Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2017,
"Fun with Cancer Patients: Kanazawa" is supported by the Lottery Fund

Media Support by: Hokkoku Shimbun, Hokuriku Broadcasting Co.,Ltd.
Ishikawa Television Broadcasting Co., Ltd. TV Kanazawa and FM Ishikawa

Director: Yoko Ueda, Yuko Kuroda, Masahiro Saito, Akane Nakamori, Yohei Yamada

Secretariat (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa): Yuko Kuroda, Yuna Yoshida, Yuki Sato, Kumiko Kibi

Editing/ Writing: Mai Kita (Onomatope)

Public Relations (21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa): Yoshiyuki Kawamori, Kei Sakamoto

Advertising Art(Hotchkiss): Yoichi Hisamatsu, Tomonori Ozaki

Copy Writing: Shin Miyabo(Wazanaka)

Trailer: Ryoji Yamada

Video Edit: Ichiro Mae

Photography: Hiraku Ikeda

カナザワ・フリンジ 2016-2017 記録集

執筆:上田陽子、喜多舞衣、黒田裕子、齋藤雅宏、中森あかね、山田洋平(50音順)

編集:吉備久美子、吉田裕梨、黒田裕子

デザイン(Hotchkiss):久松陽一、尾崎友則

デザインアシスタント:北口加奈子

翻訳:アンドリュー・スコット

印刷:株式会社 橋本清文堂印刷

発行日:2018年3月20日

発行:金沢21世紀美術館[(公財)金沢芸術創造財団]

〒920-8509 石川県金沢市広坂1-2-1

Document for KANAZAWA FRINGE 2016-2017

Texts: Mai Kita, Yuko Kuroda, Akane Nakamori, Masahiro Saito, Yoko Ueda, Yohei Yamada (Alphabetical Order)

Edit: Kumiko Kibi, Yuna Yoshiida, Yuko Kuroda

Design(Hotchkiss): Yoichi Hisamatsu, Tomonori Ozaki

Design Assistant: Kanako Kitaguchi

Translation: Andrew Scott

Printed by: Hashimoto Seibundo Co.,Ltd.

Date of Publication: March 20, 2018

Published by: 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa
1-2-1 Hirosaka, Kanazawa, Ishikawa, JAPAN, 920-8509

無断で本書の全体または一部の複写・複製を禁じます。

©21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa All rights reserved. ISBN: 978-4-903205-67-0